YEARBOOK 2023
VoL.48

Kyoto International Student House

特集　第5回公開講演会

Haus der Begegnung

(公財)京都国際学生の家

【設立理念】

公益財団法人京都国際学生の家の成立の趣旨

Kyoto International Student House ・ Haus der Begegnung Kyoto

PRINCIPLE AND PURPOSE

by Dr. Werner Kohler

"Haus der Begegnung" is a house where men from different continents and cultures, of different races and colors, different social strata, religions and outlooks live together. The house members face realistically the difference of national, cultural and religious backgrounds. It is a "House of Encounter" as its name "Haus der Begegnung" indicates. It is an experimental training place for peace, which is not merely absence of war, a training place for the construction of a new form of society necessitated by the demands of the world of tomorrow.

The house life is guided by the following considerations.

1. The living together in the International Student House Kyoto is not an end in itself. Nor is it a world of its own. It is concerned with the daily human society to which we all belong. Our human society, as history shows, is in need of constant renewal. Forms of society change, old traditions decline, new ones arise; but Life Together is the destination of man.

2. Life Together is life in relation with others, with those we like and those we dislike, with those who have different convictions and opinions. Life Together means love and respect for those who are different. We have the freedom to agree to disagree with one another.

3. Life Together is life in daily renewal. We all have a natural inclination to favor our own beliefs and concepts. The house members let themselves be mutually questioned and challenged in their opinions, attitudes and habits. By nature we are inclined to have relations with, and fulfill responsibilities to, our own family group and those of our own social milieu or those that are useful to us. We aim to outgrow these self-centered inclinations. Life Together allows for diversity and runs counter to conformity and unconformity. The traditional societies classify people according to their educational, political, moral and financial standards. Life Together transcends these traditional classes.

4. Life Together is an adventure and an experiment. "Haus der Begegnung" in Kyoto practices in small dimension a new form of society. This new society is both conservative and revolutionary in that it respects the past with its traditions and looks to the future with its possibilities. It is a form of society which is renewing itself in free self-criticism of its members. The basis of this Life Together is Life itself.

Thus it is hoped that students living in this house are willing on their own initiative to participate in various activities such as seminar-like meeting, common meals and house chores of different kinds.

*Dr. Kohler was the most central among the forwarder of HdB in 1965. He and Dr. Inagaki served as the first House Farther.

表紙のデザイン作成者：中野瑛理香/山本 HP
写真：表はクリスマス時の HdB 玄関ホール
裏は冬の星座プレアデス星団の「SUBARU」(星言葉: 幸運を祈る)

【巻頭言】

ポストコロナとハウス

吉村　一良（Yoshimura Kazuyoshi）
（HdB 理事　京都大学名誉教授（理学部・理学研究科）　1981OM　元 HF）

この度、Yearbookの編集委員に就任し、勿論、編集会議には何度か出席しているが、この巻頭言を書くことが最初の仕事らしい仕事となった。また、内海理事長、村田先生の方からHdBのOM会の代表になってもらえないかとの打診があり、その後、OM会に置いて承認されて、村田先生からOM会の代表を引き継ぐことになった。宜しくお願いしたい。今回のYearbookは、特集も橋本求教授とセドリック・タッセル准教授の講演会であるが、橋本君は私がハウスファーザーの時のレジデントだし、セドリック君は私が理学研究科で現役の頃の私の研究室の大学院生である。そんな訳で私にとっても記念すべきYearbookとなった。

まず巻頭に当たり、コロナ禍について考えてみたい。新型コロナも感染症としては5類に移行して大分収まった感がある。私はコロナ禍の終盤で2023年3月末で定年を迎えた。その間、コロナ禍の2年間、理学研究科化学専攻の専攻長を努め、コロナ対策専攻長などと言われたのものである。思えば、ずっとコロナに翻弄された現役の最後であった。会議も講義もオンライン。学会の講演もオンラインで行われ、懇親会さえもオンラインであった。ハウス(HdB)の理事会などもオンラインで、ハウス活動も自粛などを余儀なくされ儘ならない状況が続いたが、今年になり色々な活動が対面で再始動し活発化して本当に良かったと思う。理事長、ハウスペアレンツはじめ、関係各位、レジデントの皆さん、これまで大変ご苦労されたと思うが、ようやくほっとされていることと推察し心から感謝する次第である。コロナ禍ではもちろん良いことはあまりなかったように思うが、リモートでも会議・講義を行えるのだという観点では随分認識が進歩したと思う。例えば、コロナ以前でも、大学ではリモート会議や講義の十分な準備・設備は出来ていたはずだが、ほとんど誰も使用しないという状況だった。私自身もコロナ以前はリモートで何かをするなどほとんどなかった。それがコロナ禍で状況が一変した。授業も会議も否応なくリモートがマストになり、どうすればいいの？などと言っている場合ではない状況となったわけだ。そのお陰と言うか、コロナの功罪の功の部分と言うか、リモートで何かをやると言うことに皆が全く抵抗がなくなったと痛感する。私の家内も毎日のようにオンラインヨガを楽しんでいる。パソコン音痴の家内なので、以前だと全く考えられないことだ。このようなことは、ちょっ

と語弊はあるが、コロナ禍がもたらした少し良い面なのかもしれない。

また、このこととは直接関係ないことかもしれないが、SNSや通信技術の進歩の目覚ましさには目を見張るものがある。私はレジデントの頃に親友になったシリキャット君(今回、OM便りに寄稿してくれた)とも、facebook(meta)を使ってスマホで週一回位の割合で、カメラをオンにして長電話や音楽を演奏したりして楽しんでいる。しかもwifi完備なら完全に無料であり、昔では考えられないことである。世界はつくづく小さく、そして狭くなったと感じられるのである。そう言えば、シリキャット君の学生時代の研究テーマは「移動通信」であった。そこで彼は移動通信におけるエラーの画期的な理論を構築し、博士号を取得したと記憶している。そんな彼が博士号取得後に就職した天下のベル研究所でやった仕事がテレビ電話の開発だと聞いたが、その頃は全く売れなかった(流行らなかった)そうである。時代が変わるとこうも変わるのであるか、と驚かされる。

しかしそれでも、コロナ禍が収束し、およそ全てが対面に戻ってみると、対面の良さが改めて感じられるのである。やはり対面でないとダメだな、と痛感するのである。相互の本当の理解もやはりリモートでは得られないと感じられた方も多いのではないだろうか。飲み会もオンラインでは全く味気ない。

そして、そう思って世界を見てみると、世界は近くそして狭くなるどころか、遠く遠く感じられる。そんな物事が世界中に見受けられる。そして、世界中が平和に暮らして行く道は、本当に遠く険しく思えてしまう今日この頃である。混沌とした世界の行く末が心から案じられ、憂えてしまう今日この頃である。

さて、ここでハウスのことに戻ろう。コーラ先生と稲垣先生のハウス創設のコンセプトであるハウスの理念”Haus der Begegnung (HdB)”を思い起こしてみよう。共に暮らし、時には「ツノ突き合わせて」意見を戦わせたりしながら、真の相互理解を築き、本当の友情を育む、そんな場がハウスであり、それがハウスの設立理念だと認識している。そうやって親友となった人には、そしてその真の友の国には、決して銃やミサイルなど向けられないのであって、その積み重ねによって戦争などこの世界から無くなるのだと言う信念のような強い想い、そして切なる願いがハウスの理念にはあるのだと思う。

実際、イラン・イラク戦争の時にも、ハウスにはイラン人とイラク人のレジデントが仲良く暮らしていた。私がレジデントの時にも、北朝鮮のチョンさんと韓国のチョンさんが共に暮らし普通に会話していた。イラクが大変だった時にも、私の頃のレジデントだったカリム大先生がイラクからハウスの40周年記念式典に駆けつけて講演をしてくれ、同じくフィリピンから駆けつけてくれたスイス人のアントンと私と共に旧交を温め合った (Yearbook Vol.46 (2021)、「ハウスと私」参照)。ハウスの関係者の皆さんなら、そういった経験を少なからずお持ちだと思う。私も、そんなハウスの理念をこれからも抱き続けながら、ハウスと関わって行きたいと改めて思う。今後ともよろしくお願いしたい。

ちょうどクリスマス、そして年末年始の時期にこの巻頭言を書いたので、最後に私

とシリキャット君が大好きなJohn Lennonの歌の歌詞を載せて、私の取り止めのない雑文を終わりにしたいと思う。ご清覧多謝！

Happy Xmas (War Is Over)

So this is Xmas!　And what have you done?
Another year over.　And a new one just begun.

And so this is Xmas!　I hope you have fun.
The near and the dear one.　The old and the young.

A very Merry Xmas, and a happy New Year!
Let’s hope it’s a good one without any fear.

And so this is Xmas, for weak and for strong.　(war is over, if you want it.)
For rich and the poor ones, the world is so wrong.　(war is over, now.)

And so happy Xmas, for black and for whites. (war is over, if you want it.)
For yellow and red ones, let’s stop all the fight (war is over, now.)

A very Merry Xmas, and a happy New Year!
Let’s hope it’s a good one without any fear.

So this is Xmas!　And what have we done?
Another year over.　And a new one just begun.

And so happy Xmas, we hope you have fun. (war is over, if you want it.)
The near and the dear one, the old and the young. (war is over, now.)

A very Merry Xmas, and a happy New Year!
Let’s hope it’s a good one without any fear.

War is over! If you want it! War is over! Now!

(written by: John Lennon, Yoko Ono)

～　目次―CONTENTS　～

【設立理念】
PRNCIPLE AND PURPOSE …… 見返し

【巻頭言】
・吉村一良　ポストコロナとハウス …… 1
【目次】 …… 4
【ハウスペアレントより】
・山本慶一　HP としての二年を振り返って …… 6
・山本夏子　VIVA!!　ハウスマザー …… 8
【保全委員会活動報告】
・内海博司　設備トラブルと保全委員会の対応 …… 10
【特集：第 5 回公開講演会】
・内海博司　公益財団法人京都国際学生の家 第 5 回公開講演会と
次回講演会のお知らせ …… 13
＜ HdB で育った先輩達＞
・橋本　求　パンデミックと自己免疫 …… 15
・タッセル　セドリック
Begegnung of people in HdB,
Begegnung of atoms in the lab …… 18
＜ HdB の過去・現在・未来＞
・福田綾乃　HdB に至るまで …… 20
・目木涼介　The intoroducon of my activities …… 22
・劉　笑聡　Discoveries in Transition: Embracing Diversity and
Belonging at HdB …… 23
・村田翼夫　ハウスで学んだこと …… 24
【留学生基金の支援を受けて】
・Stellah Namulindwa
THANK YOU…An appreciation …… 30
【OM 便り】
・村松　拓　Sustainable ？…… 36
・Ariyavisitakul Lek Sirikiat
Looking Back Forty Some Years …… 38
・内海博司　トゥンジョク・A・メテ教授の HdB の記憶 …… 40
【ハウスペアレンツとレジデントより】
・HF 山本慶一　2023年度公益財団法人京都国際学生の家　Events List …… 42
・安里泰貴　HdB での 3 カ月 …… 44
・Lisa Bachmann　Report HdB…… 44
・茶谷悠太　HdB－新たな我が家…… 45
・Edward Foxhall　HdB Reflection …… 46
・深沢健人　好きな映画について …… 47
・Anneke Gerken　Recipe for a Semester at Haus der Begegnung (HdB) …… 48

・Clara Heitmann　Arriving …… 49
・Bonilla Hoshikawa
A Year at HdB …… 50
・Anju Kato　留学の延長のような HdB での生活 …… 51
・Dennis Benjamin Kenneweg
A Dialogue between Buddhism and Christianity …… 52
・久我　英　生きている茶室 …… 53
・Ng Dong Lam　HdB の生活 …… 54
・Ryosuke Meki　Reflections on the first year of life in HdB …… 55
・宗岡泰斗　研究手帖として
–僕が「ジェンダー」を語る時に思うこと– …… 55
・Chris Müller　My special time in Kyoto and at the „Haus der Begegnung“ …… 57
・Nakano Erika　パンを求めて …… 59
・野村洸太　HdB での生活 …… 60
・Wongprasertkun Pornpailin
Lively HdB dormitory …… 61
・Jindapa PHINMEE
My HdB memories …… 62
・仇　宏暄　さよならは悲しいことばじゃない …… 63
・劉　笑聡　My Ping Pong Revival from HdB …… 64
・Damian Ratto　My first 3 months in HdB …… 65
・Ando Harilalao RAKOTOMAMONJ
My RAMEN love story …… 65
・Lindert Selma　Zero Japanese and One-Hundred Percent Commitment …… 67
・WANG REN　日本語学習の穴場 …… 68
・王　然　Keep HdB GREAT …… 69
【資料】
・公益財団法人京都国際学生の家　役員等 …… 71
・2023年度補助金・寄付金・その他ご支援 …… 73
・公益財団法人京都国際学生の家の略史 …… 75
・公益財団法人京都国際学生の家　利用者の集計 …… 80
・公益財団法人京都国際学生の家の後援会会則 …… 83
・公益財団法人京都国際学生の家の同窓会会則 …… 84
・施設概要 …… 87
【編集後記】
・笹山幸子　公立高校女性校長のキャリアパス …… 88
・福田彩乃　編集後記 - HdB でも苦しむわたし - …… 90
・内海博司　一難去ってまた一難：能登半島地震に対応している OM …… 92
【賛助広告】 …… 93
【寄付金振込用紙】

【ハウスペアレントより】

ハウスペアレントとしての 2 年を振り返って

HF　山本 慶一

今年はハウスペアレント(HP)としての HdB 生活の最後の年となり、エネルギッシュな学生達と一緒に過ごしてきた 2 年間が貴重な体験でもあり、とても懐かしく思い出されます。

今年の春先、私達は相次いで緊急入院や手術を受け、在寮する学生達や HdB の運営に携わる皆様方に大変ご心配とご迷惑をおかけすることからスタートしました。このため、大学や大学院の卒業と共に HdB を卒寮していくレジデント達全員の最後の姿を見送ることが出来ませんでした。卒業祝いの夕食会を開くことは出来たものの、とても残念な気持ちでおります。

一方、卒寮した学生達からは、其の後の HdB イベントへの参加の機会を介して気遣いの言葉を戴いたり、お見舞いのメールを戴いたりと、誠に心温まる思いで彼らと一緒に暮らした 2 年間の HdB 生活の絆を強く感じております。

今年の 1st Semester は、7 か国の留学生と日本人学生、総数 22 名でしたが、2nd Semester の 12 月現在は、アジア、欧州、アフリカ、北中米、南米からの 9 か国の留学生を含む総数 30 名のレジデントが在寮しております。

HdB の雰囲気も在寮するレジデントによって大きく変わるので、皆で一緒に作り上げるイベントも心配の連続でした。それも国文化の違い、食文化の違い等から派生するところが多々ありましたが、不思議なことにいつも結果オーライといったところだったでしょうか･･･。これが HdB マジックと言えるかもしれません。イベントを重ねるごとに共に暮らすレジデントが国籍を超えて無意識の中で緩やかにつながっていってます。

今年は嬉しいことがありました。

1965 年に建設された HdB では、日本人学生と海外留学生とが一つ屋根の下で、日々共同で生活し国や民族を超えて出会い違いを認め合う試みが行われてきましたが、そ

れらの活動が兵庫教育大学大学院で教育研究を専門としている学生達の目に留まり、突如見学・インタビューの申込がありました。

より良い教育コミュニケーションとは何かというテーマのもと様々な実践例を調査されてきた中、自分たちの大学の実情を踏まえて、日本人学生と外国人留学生のコミュニケーションの円滑・活性化にスポットをあてたものです。中でも他の学生寮にない HP という制度について、また HP の役割そしてレジデントとの関係について強い関心を持たれていました。インタビューは、HP とレジデント其々に対する質問という形で始まりましたが、海外留学生や日本人学生など多くのレジデント達が積極的に参加してくれまして、予定の時間を大幅に超え大変話が盛り上がりました。また逆に兵庫教育大学の学生･先生(4 人)も私たちのコモンミールに参加していただき、貴重なフィールドワークの体験となったことでしょう。

一方、私達も、国際的なコミュニケーションの取り組みについて教育の場で研究されている大学関係者からの申し出により思いもよらない刺激を受けて、HdB の設立目的、そして歩んできた歴史の重みを再確認する機会ともなりました。
同時に義父が HdB の日本名称を京都国際学生の家ではなく、京都「**国際学生の家**」の名称に強くこだわり続けたその理由に気づかされた時でもありました。

2024 年元日は､昨年同様にハウスに残る留学生に日本の伝統的なお正月風景やお正月のおせち料理(お屠蘇、祝肴、お雑煮、お煮しめ)を楽しみ味わって戴きたいと計画し、14 名のレジデントが HP ルームに集まってくれました。HM は数日前からその準備で大変でしたが、きっと思いは伝わったことでしょう。

昨年まで世界中で猛威をふるった新型コロナウイルスによって、私達人間が地球の支配者でないことを思い知らされました。しかし未だに、世界のいたるところ人間同士がどちらが非であるかと言い争いが絶えず、暴挙が行われています。頼みの綱の国連は時として機能不全となり、その存在が危ぶまれています。

常々、「歴史は学ぶものであって、戦争の具にしてはならない」と言われてきていますが、HdB での 2 年間の生活とイベント毎の写真でみる皆の笑顔をとおして、その言葉の重みを痛切に感じております。

最後に、これまで何とか私達　HP としての責務を果たせてこれたのは、内海先生始め運営に関わる皆様方、また Office スタッフの方々のご協力の賜物であり、感謝申し上げます。誠に有難うございました。

VIVA!!　ハウスマザー

HM　山本 夏子

HdB での生活でハウスマザー（HM）の役目の最重要は食です。今年度から月 1 回になったコモンミール（CM）や様々なイベントには食事がつきもの。その時々のメニューのバランスや食材の分量をその月の予算の中で考える事が私の役目です。
料理担当のクッカーからメニューとショッピングリストがスプレットシートに送られて来て、それを見ながらCM当番と話し合います（半期ごとに 1 人最低 1 回のクッカーとヘルパーが義務づけられている）
メインメニュー１は肉入りの料理、メイン 2 はベジタリアン（ヴィーガン）用のメニュー。サイド１，2 も同じ様にあってデザートが付きます。デザートは便利なメニューで、ケーキであれば、自分の都合の良いときに作り、当日はお皿に盛れば良い。というわけで、就活などで多忙な学生達に結構選ばれます。
　例えば 2024 年 1 月 12 日のCMのメニューは、台湾料理のルーローハンとおでん（ベジタリアンも可）　サイドメニューに、しじみの味噌汁とベジタリアン用に豆腐と揚げの味噌汁。コーンキャセロール。デザートは大学芋アイスクリーム添え。これらは全てレジデントがメニューを考え、ここにご飯を何合炊くのか？又はこの料理にはパンが良いか？　オフィースの水谷内さんと相談しながら決めます。
彼女は、いつも私に的確な助言をしてくれる、とても良い相談相手です。野菜が足りない場合はサラダを足したり、ジャガイモが余っていたら、ポテトサラダを作ったり。と、その時々で工夫します。ご飯が余った時、おにぎりにしておけば、いつの間にかきれいに無くなっています。（さらに漬物があれば最高！）
　今秋の入寮生 13 人の中に 3 人のベジタリアンがいました。
その中の 1 人がグルテンフリーということを聞き、どうすればよいのか調べてみました。これまでヴィーガンは居たので少しは慣れていましたが、グルテンフリーは初めてのケース。
グルテンフリーとはセリアック病の患者が行う、グルテンを摂らない食事療法の事です。欧米諸国の人に 25～30％の割合で起こる遺伝性の自己免疫疾患。
日本人では 0.3％の数少ない病気。だから小麦アレルギーの事は知っていましたが、セリアック病に関しては全く知らなかったので悩みました

　例えば上記のメニューで考えると、先ずおでんを昆布だしで作る。ベジタリアンは

かつおの出汁は NG。練り物の中に魚が入っているのでこれも NG。だからベジタリアン用は大根、こんにゃく、ジャガイモなど野菜のみとなり、醤油には小麦が入っているので、グルテンフリー用のものを使う。
次に味噌汁も昆布だしのみで、味噌にも小麦が入っているのでグルテンフリーの物を使う、コーンキャセロール(アメリカ料理で数種類のコーン、チーズ、サワークリーム)に使われる小麦をクッカーは豆の粉で作るグルテンフリー用のフラワーを使用、という風になる。一つのメニューを数種類の調味料や具材で作る、というわけです。

小麦はグルテンを有するため私は代わりに米粉を使うことにしました。大麦の中の麦茶に使われる麦はグルテンフリーと聞きますが、ハウスではたまたま私がルイボスティーを使用。　ルイボス(Rooibos)は南アフリカに自生するマメ科の植物なのでグルテンフリーの彼にも、和、洋、中のどのメニューにも合うお茶です。

夏には冷蔵庫にルイボスティーを作っておくと喜ばれました。
彼は私に「これは食べても大丈夫ですか？」といつも聞いて来ます。だからメニューを考える時点で彼の事をどうすれば良いか？いつも考えていました。
CM で彼がお皿に色々な料理を盛り付けている所を見るとホッとします。

マーケットへ行っても、「グルテンフリー」という文字に敏感に反応している自分に驚きました。欧米にはグルテンフリーの食材が数多くあるそうです。
30 人のレジデントが居れば、食の問題は色々出てきて当たり前。こちらもそれに対応出来るように備えなければなりません。

2024 年元日も去年に続きレジデントを HP ルームに招待しました。
おせち作りは年末から香港出身の Alvin 君が毎日手伝ってくれて、とても助かりました。彼の国の新年のメニューの話題を話しながら楽しくおせちを作りました。年末で賑わう錦市場へも一緒に行きました。
グルテンフリーの彼には、お雑煮のお餅を沢山食べて欲しかったのに、残念ながら食べるのに四苦八苦していたようです。
総勢 16 人で味わう最後のお正月を堪能して、ハウスでの私の大役は終了。とても有意義な楽しい二年間でした。

最後に、私が尊敬する初代ハウスマザーのネリー・コーラーさんの古い写真が見つかりました。1995 年、長女のケティさんと HdB 創立 30 周年記念式典のために来日された時の写真です。
この時、30 年後に私がこうなるとは誰が予想したでしょうか？
人生って、素敵、楽しいですね～ !!

1995 年 7 月長岡天満宮にて

【保全委員会活動報告】

設備トラブルと保全委員会の対応

内海 博司
（HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965OM、元 HF）

昨年のイヤーブックには保全委員の深海委員からの報告として、北側隣家とのブロック塀の耐震強化（最終決定待ち：見積もり額未定）、本館地下の消火水槽の更新：3月６～8日実施予定（見積もり額236万5千円、本館・西館屋上の電気給湯器のガス給湯器への交換（11月28日完了：実施額275万円）が上がっていた。

そして、第 33 回理事会では、深海委員より下記の報告がなされた。

1） 既存改修工事の費用に関して

① 本館・西館屋上の電気給湯器の撤去とガス給湯器に交換設置する工事
施工業者：R 電気により 11 月 18 日～28 日にて完了済。支払費用：275 万円

② 地下消化水槽交換に関する工事
施工業者：K サービスにより 3 月 6 日～７日にて完了済。管轄消防署の点検と検査を受けて合格完了となる予定であったが、作業時部品破損のため延期。部品改修後、3 月末に点検・検査完了予定。支払費用（予定）：236.5 万円）

2）現状の汚雑排水槽並びにポンプの清掃・点検に関して

経緯：2022 年 11 月ガス給湯器改修時に給湯管が破裂。同時期、地下トイレ下のピット内水位がほぼ満水になる。更に地下トイレの排水詰まりが生じ、排水管洗浄実施。これらの原因究明のため、汚雑排水槽・ポンプのメンテナンス及び配管構造の解明の必要性が生じ、清掃・点検作業を依頼した。施工業者：K サービス（K ポンプ）。1 月 31 日に地下男女トイレ並びに洗濯室関連の汚雑排水槽（消化ポンプ室）及排水管の清掃と点検作業の実施。その結論は、男子小便トイレの排水管が地下で破裂・破損していて滝の様に破水するのが現認されたため、男子小便トイレは使用停止中。女子トイレも漏水していると推測される。消化ポンプ室の水槽内へのトイレ排水管が腐食しているのも現認された。但し、洗濯室からの排水管は現状機能していると推測された。そこで地下男女トイレの修復か、その代替案の実施かが緊急案件となった。その結果、下記２件に関する見積もりを依頼することになった。そこで、K サービス、R 電気、I 設計室の３社に状況説明、代替案をも含め見積もり依頼した。

- 地下男女トイレの汚雑水装置を修復して使用する案：トイレ外側の踊り場に汚水槽を掘削・埋没して新たなポンプで排水する案

- １階に男女トイレを移設する案：１階西側の職員用トイレを男子トイレに、隣の風呂場を女子トイレに新たに改装する案。この場合には、洗濯室の排水は現在生きて居るので、そのまま使用する。

３社から見積をとって検討したところ、予算内で収まるＲ電気に発注することが提案され、質疑応答の後に了承された。修繕にあたっては地下トイレから事務室隣のトイレに移管し、男女トイレが増設される。また、防火扉を外せないことから、奥の部屋との間の間仕切りを設け、自動照明器具を設置する。

その結果、R電気による一階トイレ新設案に決定。2023年6月15日にトイレ新設工事が完了、費用は264万円。その他の修繕の検討事項としては、ブロック塀の耐震対応、西館の活用があることが確認されている。

昨年の報告で漏れている事項として、今年の新年にかけ旧給水汲み上げポンプの故障により、温水器への給水管から水漏れがあり、一週間以上水が出る突発状況が起き（HPやオフィスが休み）、正月明けになって、R電気にお願いして修理したが、高額の水道料金の請求を受けた。この突発事故を受けて、オフィスが閉まるような時に生じる緊急事態に備えて、ALSOKと年間契約を結んだ。

その他の小さな工事は、2023年6月HPより依頼の庭の照明設置工事（13万円）。2023年7月　非常階段1・4階のドアノブ不良改修（20万円）。2023年9月　寮室におけるエアコン・エアコンダクト改修（9.1万円）。今後の予定として、2023年12月　北側駐車場の整備改修工事（ライン引き直し、砂利入れ、ナンバープレート設置など）（約20万円予定）。消火器の耐用年数超えにより2023年12月～2024年1月に消火器の入替（約15万円予定）。2023年10月　実施の建物定期報告による指摘事項への対応（要検討、現在見積依頼中）に関しては、今後対応する必要がある。

北西側ブロック塀の件に関しては、R電気さんに見積ったセットバックする内容（ブロック塀の削除とセットバックして，隣家が見えるフェンスの設置）でN不動産に確認した。しかし、N不動産は関連の建設業者に改めて相談して、現状のブロック塀の補強に際して45cmのブロックではなく、30cmのブロックや金型の控えを使って隣家側に設置することでも可能ではないかという逆提案を受けた。そこで，改めて当該内容でR電気に検討を依頼し、R電気から可能という返事を受けた。当初案（隣家に接続する部分についてブロック塀を補強する）で採用することを検討している。

一昨年の2021年には、京都ライオンズクラブ様からのご寄附で全寮生室（34室）の机・椅子・マットレスが新しくなり、更に中西電建株式会社様の滋賀銀行SDGs私募債のご寄附を受け、全研究者室（7室）の机・椅子が新調された。これらのご寄付によって、1965年から使い続けて老朽化した調度品（机・腰掛け・マットレス）が新調された。大規模の寄付金集めをしたが、建設費の高騰で耐震対策くらいしか出来ず、学

生の調度品にまで手が届かず残念に思っていたところへのご寄付は、本当に有り難く、心からの感謝の意を顕したい。

学生達が使っていた台所は、2000年に新調した調理器も古くなり、汚く汚れ、整理・整頓が上手く行われていなかったので、オフィス・スタッフの働きにより、調理器の新調、新しい食器棚の設置、壁の塗り替えなどで快適な台所に変身した。

また一昨年以来、本館の老朽化して薄汚れている壁や天井ばかりでなく、学生の部屋の壁に関して、オフィス・スタッフの献身的なペンキ塗りなどの労働によって、本学寮の生活空間は開館当初のように、見違えるほど美しくなった。更にスタッフ達によって、研究者用の部屋の台所、シャワー室、台所の整備や壁のペンキ塗りなどもされ、快適な空間に改装されたことによって、宿泊している研究者達からも喜ばれている。

4年前の2019年、コロナ禍の中で学生達にとってWiFi設備の完備は必要不可欠であった。HdBの設備は学生達の努力でどうにか繋がっていたが、その配線は見た目も悪く、数社の業者の見積りでは150万円以上かかるとのことだった。丁度、ペルーからの留学生で通信機器に強いRandolph Ruiz Rodriguezさんが人肌脱いでくれて、50万円の予算で、業者顔負けの素晴らしいWiFi設備として変身させ、HdBのどこに居ても繋がるWiFi設備が誕生して、現在に至っている。感謝感激である。

HdBの南側には当初から立派な日本庭園があったが、年に50万以上剪定費用がかかり、スタッフが大きくなった樹木は伐採し、2-3年後に庭師にお願いするという維持方法を取っていたため、本来の日本庭園の面影を失いつつあった。たまたま、訪れた支援者の高田さんが、中村庭師さんにボランチィアをお願いして、学生達全員も一緒になって、庭の整備をし始めて、今年で3年目になる。中村庭師さんが、まず日本庭園の歴史のセミナーをして下さり、その後、庭の剪定作業に必要な道具もお借りして、全員で一年に一度、庭木の剪定をするようになり、見事な美しい日本庭園に復活してきた。費用の節約は勿論のこと、その活動を通じて、日本庭園の歴史を学び、その維持する楽しさも勉強する一石二鳥の取組として、現在は年中行事として定着している。

ここに保全委員会を代表して、オフィス・スタッフの献身的なペンキ塗りや台所の改装などの労働や学生達の労働と、多くのボランチィアに支えられて、改修費の大幅な削減がされていることに、心から感謝の意を顕したい。

【特集：第５回公開講演会】

公益財団法人京都国際学生の家

第５回公開講演会と次回講演会のお知らせ

内海　博司
（HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965 OM,元 HF）

5年前に、京都国際学生の家の卒寮生の会（OM会：Old Member）が発足しました。そして、多くの京都市民に(公財)京都国際学生の家の存在とその活動状況を知って頂く目的で、卒寮生及び在寮生達による公開講演会を、2019年6月8日（土）に京大楽友会館で開催する活動を開始しました。それが第一回の公開講演会でした。この公開講演会の第２の目的は、卒寮生同志、卒寮生と在寮生との交流を深めることでした。お陰で、卒寮生との連絡も多くなっています。

コロナのパンデミックが起き始めた2020年12月12日に第2回、第３回（2021.7.17）、第4回（2022.６.25）の公開講演会を楽友会館にて開催してきました。第５回（2023.6.25）は京都教育文化センターで、更に出席出来なかった人達のために2021年からは公開講演会をオンラインにし、動画は現在もホームページに公開中です。

更に、イヤーブックの特集として、その内容を活字として皆様にお届けしています。第5回公開講座の内容は、次ページ以降に掲載しています。

過去の公開講演会はイヤーブック(pdf)としてHdBのホームページに公開しています（http://hdbkyoto.jp/）。ダウンロードして下さい（ホームページの「当財団について」を開き、「イヤーブック」を開いて下さい）。

本年の第6回公開講演会は、**2024年6月29日(土)**京大病院の南西角にある「**京都教育文化センター 103号室**」（京都市左京区聖護院川原町4-13）にて開催します。ぜひ、時間を空けて、多くの皆様に出席して欲しいと願っています。

講演者は、**大菅克知**（1984 OM、医師）が「すべてはスーダンから始まった- 途上国の保健医療にたずさわって-」、**ヴァンオメン・マティアス**（2009 OM、同志社大学社会学部社会学科助教）が「From Mario to Siebold: How Japanese Video Games Culture Guided Me to Kyoto、マリオからシーボルトへ：日本ゲームカルチャーの京都への導き」というタイトルで講演します。

京都国際学生の家
Haus der Begegnung (HdB)

第5回公開講演会　入場無料

日　時：2023年6月17日（土）13:00～16:10
場　所：京都教育文化センター302号室
〒606-8397　京都市左京区聖護院川原町4-13　TEL.075-771-4221

HdBは1965年より59年間、外国人学生と日本人学生の出会いの家として活動してきました。その歴史と現在の活動状況、未来への展望を卒寮生と在寮生との講演で紹介させて頂きます。

開会の辞

13:00～13:10　内海 博司（理事長、京都大学名誉教授）

第Ⅰ部　HdBで育った先輩達

13:10～14:00 パンデミックと自己免疫
橋本　求（大阪公立大学医学部膠原病内科学　教授）

14:00～14:50 Begegnung of people in HdB, Begegnung of atoms in the lab
Cédric Tassel（京都大学大学院工学研究科物質エネルギー化学専攻　准教授）

第Ⅱ部　HdBの過去、現在、未来

15:00～15:30 **外国人学生及び日本人学生から**
在寮生有志（福田 彩乃、目木 涼介、Liu Xiacong（劉 笑聡））

15:30～16:00 **ハウスで学んだこと：平和・共生・国際協力**
村田 翼夫（評議員、筑波大学名誉教授）

閉会の辞

16:00～16:10　吉村　一良（理事、京都大学名誉教授）

参　加：来場歓迎。どなたでも参加できます。

主　催：公益財団法人　京都国際学生の家
後　援：京都新聞

連絡先：（公財）京都国際学生の家
京都市左京区聖護院東町10
電話/FAX：075-771-3648

ホームページ：http://hdbkyoto.jp/

＜HdB から育った先輩達＞

パンデミックと自己免疫

橋本　求（Motomu Hashimoto）
大阪公立大学医学部　膠原病内科学　教授

【HdB と私】

私が HdB に在寮していたのは、1996 年から 1998 年になります。京都大学医学部在学中の 2 回生から 4 回生の時に在寮していたということですので、私は学生生活の中で最も充実した時間を、HdB で過ごしたということになります。国籍も学部も大学も異なる同世代の学生たちと、一緒にご飯を食べ、一緒に銭湯に行き、文字通り夜を明かして語りあったことは、私にとってかけがえのない経験となりました。社会人になると、時に利害関係の異なる人たちをまとめあげ、一緒に仕事をしていくことが必要になる場合があります。そのような時に役に立ったのは、HdB で本当に多様な人たちと出会い、それぞれ背景は異なっていたとしても「友情」や「信頼」といった言葉は万国共通なのだ、ということを理解できたことが、大きかったのではないかと思います。

【パンデミックと自己免疫】

HdB の講演では、2019 年から猛威を振るった新型コロナのパンデミックを話題に、私が専門としております「自己免疫疾患」という病気について、お話をさせていただきました。

新型コロナをきっかけに、一般の方々も「免疫」という言葉になれ親しむようになりました。「免疫」とは、一度かかった感染症に対して二度目にはかからないようにする体のしくみのことです。例えば、新型コロナでは、ワクチンをあらかじめ打っておくと免疫がつき、新型コロナにかかったときに重症化が避けられる、というわけです。

ところが、この「免疫」が自分の体を攻撃してしまうことがあるのをご存じでしょうか？例えば、私が専門としている関節リウマチという病気がその例で、この病気では、免疫が自分の関節を敵とみなして攻撃し、関節が壊されてしまいます。あるいは、1 型糖尿病（生活習慣でおきる 2 型糖尿病とは異なり、自己免疫でおきる糖尿病）では、膵臓のランゲルハンス島が免疫の攻撃対象となり壊されてしまうため、この病気になった人はインスリンを分泌できなくなり、インスリンを注射で補わなければいけ

なくなります。花粉症やアトピーなどのアレルギーも、自己免疫疾患とは少し異なりますが、同様に免疫の暴走によって起きる病気です。自己免疫疾患の場合は免疫の攻撃対象が自己の組織、アレルギーの場合は自己ではなく外来の微量抗原（例えば花粉）である点が異なりますが、どちらも免疫が過剰反応することが病気の原因になっています。

しかし、自己を守るために発達してきた免疫が、なぜ、暴走してしまうのでしょうか？それには、「遺伝子」といものがかかわっていることが、最近、分かってきました。この考えのもととなる考え方は、チャールズ・ダーウィンによって提唱されました。ダーウィンは「環境にもっとも適した生物が、生き残り遺伝子を残していくことで、生物は姿を変えていく」という「自然選択説」の考え方を提唱したのです。例えば、アフリカには鎌状赤血球症という遺伝病があります。この病気の遺伝子をホモ（父由来と母由来どちらもその遺伝子型）で持つ人は、赤血球が鎌のような形をしていて壊れてしまうため、血栓などを起こして短命になります。しかし、アフリカなどのマラリア蔓延地域では、この遺伝子を持つ人が 10%近くいるのです。なぜかということ、この遺伝子をもっていると、マラリアにかかったときに、マラリアが隠れ家としている赤血球がこわれるため、免疫系がマラリアをみつけてやっつけることができ、マラリアに対して抵抗性になるからです。同様に、ある特定の Fcγ受容体の遺伝子変異をもっていると、免疫が活性化しやすくなり、マラリアにかかったときに重症化しにくいということが知られています。一方、この遺伝子をもっていると、免疫が異常に活性化しやすいために、全身性エリテマトーデスをはじめとする自己免疫疾患になりやすいことが分かっています。このように、自己免疫疾患の遺伝子というものは、実は、感染症に対する耐性と引き換えに自然選択されてきたのです。

私たちの祖先のホモ・サピエンスは、約 20-15 万年前にアフリカの森の中で生まれ、約 10-5 万年前にアフリカを出て世界中に拡がっていきました。この 10-5 万年の旅路のほとんどを、人類は様々なウイルス、細菌、寄生虫に囲まれて暮らしてきました。その厳しい感染環境を生き延びるために、感染症に耐性をもつ「活性化しやすい」免疫関連遺伝子をもつ個体が自然選択で選ばれ、遺伝子を現代に伝えてきたのです。しかし現代では、この「活性化しやすい」免疫関連遺伝子をもつ人たちが、自己免疫疾患やアレルギーにかかりやすいことが分かっています。たくさんの感染症が存在する世界ではこれらの遺伝子をもつことが生存に有利に働いたのですが、ワクチンや抗生物質が発見され「清潔」になった現代では、この「活性化しやすい」免疫はその力を持て余し、それが「免疫暴走」による病である自己免疫疾患やアレルギーにつながっているのです。

そして、新型コロナのさなか、新しい発見がありました。実は、現生人類は、この

「活性化しやすい」免疫関連遺伝子の多くを、ネアンデルタール人から受け継いだのではないか？というのです。皆さんの中には、2020 年ごろ、新聞やＴＶで「新型コロナの重症化に、ネアンデルタール人由来の遺伝子が関係していた」という報道がなされたことを、覚えておられる方もおられるかもしれません。実は現生人類は、純粋なホモ・サピエンスではなく、現在は滅びてしまった旧人類であるネアンデルタール人の遺伝子をごく一部受け継いできたことが、ネアンデルタール人の遺骨の遺伝子解析からわかってきました（ステファン・ベーポ博士：2022 年ノーベル医学・生理学賞受賞）。ネアンデルタール人は、ホモ・サピエンスがアフリカをでるより 40 万年も前にアフリカをでて、寒冷なヨーロッパの地で幾度もの氷河期を生き延びてきました。ですから、そのために細菌に対する強い耐性をもつ遺伝子を自然選択してきたのです。そしてそれが、ホモ・サピエンスと混血したときに、生存に有利な遺伝子として現生人類に引き継がれたということです。しかし現代では、このネアンデルタール人由来の遺伝子が、様々な自己免疫疾患やアレルギーの原因遺伝子となっていることが知られています。さらに、これらの遺伝子は、細菌感染に対しては強い耐性をもちますが、新型コロナでは実は感染そのものよりも免疫の暴走が悪さをする感染症であったため（そのためにステロイドなどの自己免疫疾患の治療薬が奏功する）、ネアンデルタール人由来の遺伝子を持つ人たちのほうが、コロナが重症化しやすかったというわけです。このように、私たちの体の中には、私たちの祖先がそれぞれの環境を生き延びる中で獲得してきた免疫関連遺伝子が刻み込まれているのです。

本日、もし私がお話しした内容に、興味を持たれた方がおられましたら、拙著「**遺伝子が語る免疫学夜話―自己を攻撃する体はなぜ生まれたか**」をご覧ください。免疫という観点から人類史を俯瞰してみることで、今までとは違ったものの見方が得られるかもしれません。

【HdB の寮生たちへ】

現在の寮生たちに伝えたいことは、この HdB で過ごす時間は二度と帰ってこない、ということです。これほど多様な人たちと、これほど深い関係をもつことは、社会にでてからは決してないでしょう。コモンミールで、皆で一緒にご飯を食べましょう。連れだって一緒に銭湯に行きましょう。ドアを開けて、友人を迎え入れましょう！

Begegnung of people in HdB, Begegnung of atoms in the lab

（名前）タッセル　セドリック　(Tassel Cédric)（フランス）
京都大学大学院工学研究科　　物質エネルギー化学専攻　準教授

【In HdB】

I was a resident in HdB between 2007 and 2009. I will always remember that as a foreigner, when one arrives in Japan, there are many rules and manner that are difficult to grasp. Living in this house has allowed me to integrate this society thanks to the wonderful students and parents who took the time and had the patience to teach me. I am thankful to this nurturing environment that taught me values of tolerance.

【Begegnung of people in HdB, Begegnung of atoms in the lab】

In my HdB talk, I discussed the evolution of my research from the time of my arrival in Japan up to nowadays. My specialty is related to inorganic chemical syntheses and the development of novel chemical compositions towards the development of better energy materials.

I first came to Japan for an internship in Kyoto University. As a master student in material science in Rennes University, a trip abroad was mandatory in order to improve my English skills and learn different synthesis techniques. Most inorganic solid-state reactions involve the use of temperatures well above 800ºC in order to form stable ceramics from precursing powders. My goal was to transform the composition of ceramics by tuning their anionic content. This 2006 internship led to the discovery of several novel oxides and notably the first example of square planar iron oxide coordination through a low temperature (< 300ºC) chemical reaction of $SrFeO_3$ to $SrFeO_2$ where the O^{2-} anion was extracted.

Tuning the composition of solid materials through their anionic content became a fascinating target towards the development of new structures and therefore new functionalities. Most of the know materials used today have been generated through a simple strategy: mixing cations from different precursor oxides. For example, the active materials in your phone and computer likely contains a derived phase of $LiMn_xNi_yCo_zO_2$ or $LiMn_xCo_yAl_zO_2$. These materials are the results of more than 50 years of solid-state research and their cationic

composition Ni, Mn, Co, Al and tuning have allowed optimizing their performance. However, we are now at the limit of the optimization of these phases and developing new materials with higher capacities and higher operating voltage could allow generating better batteries.

Over the 15 years of research in the field of solid-state chemistry, I, together with the students and staff of Kyoto University, have aimed at the discovery of new materials based on the concept of mixed anions. One of our goals is to modify the oxide O^{2-} and replace it with different anions (F^{-}, N^{3-} or H^{-}) which led to new compositions but also new structures and properties. Along the years, we have had the chance to generate numerous materials with exotic features in the field of magnetism, catalysis, and electrochemistry. This strategy is recent and can be applied to a wide range of field with a promise of a better future for numerous applications.

Chemistry is ubiquitous. It is in the paper and ink where these words are written, in the screens of our computers, cars, their batteries, their transistors but it is also in our food, medicine, clothes, make up, toys and so on. There is a necessity for better magnets towards realizing better electric motors. Better absorbing materials are required for improving the efficiency of solar panels. Batteries need better cathode materials to store and deliver energy more efficiently. The liquid electrolyte in these electric cells need to be replaced with solids to achieve higher densities and safety. New materials are necessary to generate hydrogen from sustainable sources because as of today it is generated from fossil fuels. Hydrogen will then need materials to be stored and to be used for fuel cells but also to generate ammonia through catalysis (4% of all the energy used on earth is dedicated to the production of ammonia) which is then used as fertilizer and for numerous chemical reactions.

We are in the midst of an energy-related revolution that will radically change our lives. The current trend indicates that this transition will only be successful through the development of more efficient materials that will allow society to move towards a sustainable future.

【HdB の寮生たちへ】

It has been a privilege to live in HdB. This unique moment allowed me to meet some of my best friends and my wife. Rare are the moments in life where different students from everywhere around the world with different backgrounds and cultures can encounter and share activities, meals and parties. I learned many lessons in this house that I kept precious to this day. Please enjoy and cherish your stay in this home!

＜HdB の過去・現在・未来＞

HdB に至るまで

福田　彩乃（日本）
京都府立医科大学医学部看護学科

私は京都市で 26 年間暮らしてきました。京都は住んでいて飽きないまちだと思っています。幼稚園から高校まで通い、大学生活は京都で過ごしたいと決め込んでいました。また実家のある右京区よりも大学の集まる左京区周辺への憧れが強く、実際に大学生にとってこちらの方が断然に楽しいと思っています。左京区で学生寮に住めているなんて最高です。夢がひとつ叶っていることになります。ありがたいです。

HdB を見つけたとき、あらまほしき住まいだということを思いました。実家を出てからこの寮に住むまでのあいだに、ほかの学生寮（寮生 30 人ほど）に 8 か月、シェアハウス（多い時で 8 人ほど同居）に 1 年半、そしてまた別のシェアハウス（5 人で同居）へ引っ越して 1 年半を過ごしてきました。HdB に至るまでの寮・シェアハウス暮らしでは、誰かがちかくにいてきっと寂しくないだろうということ、自分の知らないことを耳にするきっかけに溢れていること、そして誰かが時々美味しいものを share してくれることが共通していました。その日々は同居人にも恵まれて思い出深く、京都の学生寮・シェアハウス文化を引き継いでいきたいと HdB の入寮申し込み時に書き記した記憶があります。そのなかで、新たに出会った HdB を“あらまほしきもの”だと思ったのは、国内だけでなく海外からも様々な分野を学ぶ学生が集まるからです。

そして、プライベートな空間を保つという意味でも、いままでのなかで一番の環境です。ここに来るひとつ前に住んでいたシェアハウスは、古民家を各部屋ごとに使っていて隣の同居人との間は襖一枚でした。これを、互いに開けず壁として使いましたが隣の人の見ているテレビドラマのセリフが一言一句聞こえてくるような状況で、時に苦痛でした。家族同士かのように声を掛け合って暮らし、楽しかったわけでありますが…

私が京都のまちを出ていないのは、名門の京都大学に通いたかったからでもあります。中学生の頃から京都大学に憧れ再受験を含めて 4 回学部入試を受験しています。秀才の仲間入りをしたいという気持ちをいつまでも消せずに、無謀にも受験を繰り返したのでした。京都府立医科大学の看護学科に進んで看護師を目指しながらも、後ろ髪を引かれるような思いがあります(本公開講演時点ではありました)。なぜ京大でないのか、なぜ看護なのか分からない、それでも私は進んでみるのだと思います。

この寮はとても楽しいです。

堅苦しい話になるかもしれませんが、させてもらうと、このハウスに住んで平和について思いを馳せてほしいという先人のバトンを私はしっかりと受け取っていると自負しています。HdB 設立者のコーラー先生の言葉に、『単に戦争がないだけではない、平和のための実験的なトレーニングの場であり、明日の世界の要請によって必要とされる新しい形の社会を建設するためのトレーニングの場でもある。』というものがあります。私は平和について、なぜ戦争が起きるのかということについて、高校の歴史の先生に問いかけてみたり自問自答したりしてきているし、HdB に住みながらも考えるだろうし、またそれは HdB を出たあとにも生涯付き合い続ける問いになるのだろうと思います。

日本は地震が多いです。HdB で防災訓練をされていることはあるでしょうか、イベントとして今年度も取り組めたら嬉しいです。

地震は必ずまた来るので備えたいですし、12 年前に東日本大震災のあった東北は、まだ復興道半ばのところもあります。わたしは福島県の病院へ行くことを考えています。昨年の夏に一人旅で初めて東北を旅行してみて、自分の目で見て感じた少しばかりのことからではありますが、地域に住んで看護師としていつか働いてみたいと思うようになったのです（2023 年も秋に東北・福島へ滞在してきました）。それは直感的なもので、うまく言葉に表しきれないのですが、復興を手伝いたいのであり、また繰り返す震災からの教訓を改めて学びたいのだと今は思っています。

病気とその治癒・看護について現在は座学と演習を中心に身に付けています。将来は看護師として医療チームの一員として、人を救えるよう私は懸命に動くでしょう。

それでも病気や災害で亡くなる人をゼロにすることは、私達はまだできません。戦争を止めることで戦争で人が亡くならないようにすることなら実現可能なのではないだろうか。

このことを、思いながら、HdB での生活をまた楽しんでいきたいと思います。

The introduction of my activities

Ryosuke Meki（目木涼介）（Japan）
京都大学工学部

I introduced what I did since I became a university student in this seminar. The document below is the content in this seminar.

I am in Department of Industrial Chemistry, Faculty of Engineering, Kyoto University. The reason why I chose this department is I'm interested in artificial photosynthesis. Artificial photosynthesis is a process that involves using artificially designed systems to capture solar energy and convert water and carbon dioxide into oxygen and a useful energy source. When I was a high school student, I knew it and was impressed how great this technology is. However, I know there are some disadvantages about this technology as I studied in the university. Now, I'm interested in environmental problems including artificial photosynthesis. In the future, I want to work to solve environmental problems.

Next, I talked about my activities. When I was a sophomore, I participated in GIA, which is program for learning environmental problem for a half year. I took lessons where teachers from company, government, local government did every Saturday. Moreover, I visited Elementary school hit by nuclear power plant and tsunami in Fukushima. Through this program, I understood there are many approaches from government company and so on for progressing carbo neutral and they are important. Until I joined in this program, I had only perspective from technology, but I got other views. I also met many smart students who are interested in environmental problems. I was affected by them, and I came to focus on taking action. This is one of the reasons why I came to this dormitory. Another activity is joining in Aiesec, which operates international internship. I made two events with members, one was international exchange, the other was lessen about India.

Finally, I explained why I came to HdB. When I was a little child, my parents took me to foreign countries so I'm interested in foreign countries. I want to know other countries and improve my English skills through living in HdB.

Discoveries in Transition: Embracing Diversity and Belonging at HdB

劉笑聡（リュウ・ショウソウ）（中国）
京都大学医学研究科

Before my arrival in Japan, I had spent eight years immersed in medical studies and clinical training in China. Yet, amidst the relentless hustle of daily work, a fundamental question lingered within me: "WHAT KIND OF LIFE DO YOU WANT TO LIVE?" Though the answer eluded me then, it was crystal clear that a life confined solely to the walls of a hospital wasn't the one I sought. With this query as my compass, I applied to pursue a Ph.D. at Kyoto University, choosing HdB simply for its convenience and proximity. During the year spent here, I've seemingly begun to unearth some answers.

1. LIVING DIVERSITY. HdB introduced me to a diverse group of friends, encompassing various skin tones and cultural backgrounds. This encounter triggered recollections of my earlier memories before medical school when I volunteered as a teacher in Russia and Sri Lanka. I found it surprising when Russian children inquired, "Do Chinese men still maintain long hair?" while children from less-developed Sri Lanka recognized a prominent landmark in my hometown, the 'Erqi Tower.' Further investigation revealed that the former's perceptions were influenced by popular Chinese period dramas, whereas the latter's deeper understanding stemmed from the fact that the child's father had worked in my hometown. These encounters highlighted the importance of cultural exchanges in gaining a holistic understanding of our world and thus increased my eagerness to exchange ideas and knowledge with individuals from vastly different upbringings and educational backgrounds to complement one another. HdB emerged as the ideal platform to bring this vision to fruition.

2. SENSE OF BELONGING. Amidst the demanding research in Japan, my days often stretched till late night, returning to HdB with an empty stomach and fatigued mind. Yet, the most rejuvenating moments of my day occurred upon pushing open HdB's doors—greeted by the house mother's warm "お帰りなさい", generous servings of steaming miso soup from roommates, and the lively chatter echoing in the lobby, kitchen, and corridors. In a foreign land, I deeply cherish and recognize the immense value of possessing such a sense of belonging. Listening today to the beautiful stories shared by senior members that happened at this shared space across different times, my gratitude for HdB's existence was even deepened...

ハウスで学んだこと

村田翼夫
（HdB の評議員、YearBook 編集委員長、筑波大学名誉教授、19650M）

はじめに

ハウスで学んだことは沢山あります。例えば、言語では、中国語の基礎をシンガポールロウさん、ティアさん、タイ語の発音をタイのパイブーンさんに習いました。ハウスの規則を作ろうと会合した時にいろんな規則案が提出されました。中でもアメリカの法律専門家の細かい規則案に驚きました。運営方式としてハウス・チームと呼ぶ組織があったことも印象的でした。今回は、特に、平和、友好・共生、および国際協力の面について取り上げることに致します。

１．　平和確立

平和について、まず、ハウス設立の大きな目的が平和確立のモデル構築にあったことを銘記すべきであると思います。創立者の一人である稲垣博先生は、スピーチや“Year Book”記事を通して平和確立の重要性を何度も強調されていました。先生は広島で原爆を体験され、そのことを契機に「あの悲劇を二度と繰り返さない」平和確立の方法を模索されたということです。それから 15 年後にスイスの神学者コーラー先生と出会い、「京都国際学生の家」が建設されることになりました。稲垣先生は、「学寮創設に至る途において」という記事で『「出会い」は異文化理解を助ける半面、アイデンティティが異なるが故に人と人との間に相克を生じ、その結果、共同生活が破局に向かうこともある。この危機を克服しようとすれば、そこで寛容さを養うことが必須となり、その努力が戦争を避ける第一歩だというのがコーラーさんの理念だと理解した。』（”Year Book“Vol.29、9 頁、2004 年）と述べておられます。

その他、”Year Book“記事で強調された方策として重要なのは、「人間相互の連帯を築くこと」であり、そのために人と人との対話を通して相互理解が進み友情が生まれ、国境を越えた国際的な人間相互の連帯につながるとのことです。そのため、ハウスでは、「出会い」、「対話」、「寛容」が重視されてきました。コーラー先生は、「出会い」と「相互理解」のプロセスにおいて基本的モットーとして“Agree to disagree”を強調されました。異なる考えや信条を認め合うためには寛容な態度が必要という主張です。こうした考え方の基に設立されたハウスは、平和確立のモデル構築にあったと言えましょう。

1984 年 7 月初めにスイスのザースにあるコーラー先生宅を訪ねました。それは丘の上にありました。家に木製の日本式お風呂が設置されているのに驚きました。ネリー夫人に車で近くの山へ連れて行ってもらいました。牛のカウベルが聞こえ、アルプスの少女ハイジの舞台にいるような気がしました。その頃コーラー先生は入院されていたのでネリー夫人のご案内でお見舞いさせていただきました。先生は、まだしっかりしているご様子で「また京都国際学生の家を訪ねたい」、それに私が筑波大学で行っていた外国人教員研修プログラムの説明をしたところ、「すばらしい、是非続けて欲しい」とのことでした。残念ながら、

ネリー夫人とザースの山にて

ネリー夫人と共にコーラー先生のお見舞い

コーラー先生は、それから約１ヶ月後にご昇天されました。

元ハウス・レジデントだった方の平和に関する活動では、置田和永氏のミャンマー・タイ体験が印象的でした。“Year Book”の Vol.40 （2015 年）と Vol.45(2020 年)の記事によれば、置田氏はハウスで共に過ごしたミャンマーの友人（カインウー氏）の助けにより 2016 年４月にミャンマー・モン州タンビュザヤと 2017 年 11 月に同じくハウスの同僚であったタイの友人（クリサダ氏）の助けによりタイ・カンチャナブリに「世界平和の塔」を建設されました。日本軍が設立した日本泰緬鉄道で多くの方々が犠牲になったことを繰り返さないように祈念するものだったそうです。大変意義深い平和活動です。また、イラク共和国のバグダット日本人学校において 1983 年～1986 年の３年間勤務され、さらに、ミャンマーのヤンゴンにおける日本人学校の運営にも校長先生として 2013 年から 2015 年まで従事されました。

平和問題との関連で、私が体験した外国事情について話してみます。1968 年５月にマレーシアに滞在した時、首都クアラルンプールを中心に人種暴動が起きました。その時、マラヤ大学で日本語の講師をしていて首都近くにある中国人の家に下宿していました。総選挙に負けたマレー人が怒って中国人の家や通行人を襲ったものです。約５千人の中国人が殺されました。私は中国人の家にいたので怖かったです。外出禁止令が出て 10 日間余り家に閉じ込められました。人種暴動の背景にマレー人と中国人の経済的格差の問題がありました。後からマレーシアに来た中国人が先住民であるマレー人を経済的に凌駕して繁栄していることに対する恨みがあったようです。その後、マレーシア政府は、ブミプトラ政策、すなわちマレー人優遇政策を取るようになりました。また、マレー人と中国人は、ほとんど一緒に食事を取りません。背後にポークを食べるかどうかなど食事の違いがあります。彼等はお互いに文化の相違に関し、寛容な態度でないように思われます。

1997 年９月に南アフリカ共和国へ教育調査に行きました。首都プレトリアと世界一危険な都市と言われるヨハネスバークを訪ねました。ヨハネスバークへ観光に行ったとき黒人の運転手のタクシーで行き、観光もその運転手に案内してもらったので無事でした。ヨハネスバークは金鉱、製鉄所、セメント工場、金融機関も多く豊かなので、近隣諸国の貧しいジンバブエ、ボツワナ、モザン

ビークなどから多数の労働者が押しかけ仕事の奪い合いとなり、紛争が頻発して危険な街となっていました。ある国が豊かでも周りの国々が貧しく経済格差が激しいと社会状況が不安定になると思われます。平和を保つためには、近隣諸国が共同で栄えることが必要でしょう。

南アフリカは、人種隔離と差別の制度であるアパルトヘイトを行ってきたことでも知られています。9月の首都プレトリアはジャカランダが咲き誇るきれいな街でしたが、プレトリアから南へ100km余り行ったムプマランガ州ミドゥルバーグ地方の黒人が住む農村では、多くの家が土で作られ、学校が不足して以前に監獄であった建物を使用していました。また、プレトリアの町には1994年まで黒人は居住することが許されず、夕方5時には町から退去しなければならなかったということでした。こうした人種隔離・差別や貧富の差が激しいことも暴動の原因となっています。

監獄を利用した教室

プレトリアの町

２．　友好・共生

ハウスには、いろいろな文化的背景を持った方々がいらっしゃいます。ハウスの生活体験で私が印象的であったのは、インド人のヴァルマさんによる仕事分担のことです。分担で便所掃除が当たった時に彼はそれを拒否したので、平等な分担の仕事を引き受けないのは不当であると他のメンバー達と一緒に彼をトイレへ連れて行って掃除をさせようとしました。しかし、彼は泣いて抵抗しどうしても掃除をしませんでした。後で理由を聞いてみると、インドで高いカースト出身の彼は、低いカーストが行う便所掃除をどうしてもできないとのことでした。文化の違いを痛感した次第です。

パイブーンさんとチェンマイの地方教育委員会を訪ねて

また、タイのチェンマイ、チェンライ地方を何度も訪ねて教育調査を行ってきました。その際、ハウスの同期生であったパイブーンさんに大変お世話になり助か

りました。特に、農村、山地民集落、各種の学校（初等・中等学校、職業学校、福祉学校、仏教学校、山地民学校など）への案内や通訳もしてもらいました。地方の教育員会へも一緒に行きました。2014 年にはチェンマイにある公益財団法人オイスカ（OISCA）の環境教育の実践活動も見せてもらいました。中高校生が、森の中で植林や有機農業の活動を実践していました。人間と他の生命との共生という大きな目標を掲げ、持続可能な地方の発展を目指す活動が注目されました。

1996 年 7 月にインドネシアを訪ねた時、ジャカルタ空港から出てハウスの同期生であったムルヨノさんの自宅を目指しました。到着してタクシー代を確認されたので答えると普通の約 3 倍支払っていました。運転手は、外国人の不慣れな旅行者とみると遠回りして料金を高くしていたのです。それを知ったムルヨノさんは、タクシーやバスの乗り方、買い物の仕方、道の聞き方などを教えてくれました。お陰で、その後、ぼられずに済みいくつもの学校訪問もできました。

2011 年 10 月にカナダのトロント市を訪ねた時に、元レジデントであった友人のトンミンさんに会いました。彼は会社を退職していて、トロントの町を案内してくれました。特に町の中心にある自然公園には素晴らしい林や川があり感銘を覚えました。彼は、建築家でいくつもの鉄道駅をデザインしたとのことでその詳しいデザイン資料をみせてもらいました。

３．　国際協力

ハウスにはいろいろな特色がみられます。大きな特色の一つは、外国人留学生と日本人学生が共住していることです。日本人学生が留学生と一緒に生活するので､留学生に日本の社会･文化の特色を知ってもらう機会も多くなります。例えば、仕事を平等に分担すること、遠足のように一緒に旅行することなどです。そして、日本の特色を外国の方々に知ってもらうことの重要性に気づきました。さらに、ハウスの特色として組織運営面で「ハウス・チーム」が組織されてきたことも挙げることができるでしょう。それには、運営委員代表、レジデント代表、さらにペアレントが参加してハウスの運営のあり方を民主的に協議するものです。

筑波大学において「教育開発国際協力研究センター」（CRICED）が 2002 年に創設され、私が初代センター長になった時、ハウスで学んだ特色を活かすように工夫しました。まず、運営委員会のメンバーに教育学系の先生方や留学生代表も参加してもらうように致しました。広島大学にも同様なセンター（CICE）がありますが､運営委員会に教育学部のスタッフはほとんど加わっていません。

また、CRICED の主なプログラムとして、日本の教育の特色を外国の方々に知ってもらうためそれらの海外発信を試みました。例えば、授業研究（Lesson Study)、特別活動（最近、海外で人気が出て“Tokkatsu”と表現されている)、障害者教育などです。他方、広島大学の CICE では、主なプログラムとして国際的な教育課題に取り組んできています。例えば、“Education for all”、“Education for SDGｓ”、「教員研修のあり方」などです。

CRICED では、2003 年～2005 年にかけて日本の教育の特色を学びやすいように研修キットを作成しました。それは、教育制度、学校経営、カリキュラム、教員養成・研修、学校の生活と文化など多様な分野にわたっていました。「学校の生活と文化」の一部を紹介いたします。

例えば、日本の運動会には児童生徒全員と親や地域の方々も参加しますが、外国のスポーツ大会ではこうしたスタイルは見られないようです。その方式がよいと評価され、タイの私立学校で普及しつつあります。小学校では、クラス担任の先生が教室で児童と共に給食を食べ、児童とのコミュニケーションを図っています。この方式も珍しいようです。私がみた東南アジア諸国や南米の国々では、先生は児童生徒と別の部屋で昼食を取っていました。児童生徒による学校掃除は、普通、欧米や南米諸国では見られません。掃除をする大人の方を雇っています。アジア諸国では学校掃除は見られます。ただし、日本の学校のように徹底していないし、掃除の時間中、先生は児童生徒がサボらないように見張りをしています。日本の学校の掃除を見学した留学生達は、先生がいないのにどうしてあのように熱心に掃除をするのかと不思議がっていました。

こうした特別活動を活かした教育が外国でも人気を呼んでいます。

給食の時間2（教師の一日）

6年生、2003年12月　　1年生、2003年12月　　1年生、2004年7月

（DC－23）

運動会　2（学校の行事）

（DC－7）　　2004年9月

例えば、モンゴルのウランバートルに設立された「新モンゴル学校」です。私が 2019 年 9 月に同校を訪ねると、学校掃除、給食、学校行事などに力点を置いていることが理解できました。その後、元横綱であった日馬富士もウランバートルに同様な学校を建てました。他に、エジプト、メキシコ、ブラジルなどの学校でもそのような特別活動を取り入れています。

さらに、日本の教育経験から学ぶことも多いと思い教育の歴史研究も行いました。特に、開発途上国で問題の多い、就学困難、留年・中途退学、へき地教育、女子教育などを取り上げました。CRICED でその研究を始めていたところ、JICA のメンバーが一緒に研究を行わせて欲しいと要望があり、合同の研究となりました。成果は、『日本の教育経験-途上国の教育開発を考える』(JICA, 2003 年)、“The History of Japan’s Educational Development : What implication can be drawn for developing countries today”(JICA, 2004) として出版されました。それが好評だったため、後に、スペイン語、モンゴル語などでも翻訳出版されました。

【留学生基金の支援を受けて】

THANK YOU…An appreciation.

Stellah Namulindwa（ウガンダ、2020OM、研究者室滞在）
（Intelligent Transport Systems Laboratory Department of Urban Management, Kyoto University）

It has often been said that during moments of sorrow, it is difficult to be philosophical. In the recent aftermath of my mother's passing, draped in a veil of sorrow, adrift in a sea of emotions, at a baffling loss of words to articulate the depths of my grief and despair, I have come to personally attest to the fact that sorrow, indeed, is the ultimate test for one's philosophy of life. In order to mature, one requires a development of; true and honest affection, confidence, noble causes to champion, appreciation for life and community, discipline, selfdrive, serene resilience, devotion and a considerable amount of gentle but firm guidance along the early years of life. All that goes into cultivating such an enlightened and dedicated mature life, came to me through my mother. Born to Mr and Mrs. Kibuuka on 1st May 1965, my mother was the 3rd born of twenty children. She attended Kayanja Primary School – Sango (1972 – 1979), St. Aloysius Girls Secondary School – Bwanda, (1980 – 1983) and graduated with a high school diploma in Business Administration from Caltec Academy – Kampala (1985 – 1987). Wrapped in an aura of perpetual cheerfulness, she was a beacon of positivity everywhere she went and to all who knew her. She was intelligent, beautiful, strong, hardworking, compassionate and very kind. She was also a devout wife and caring mother who deeply loved her family as well as an icon of virtue who governed her household piously and was well reported of her good works in the communities in which she lived and served. The first thing everyone noticed on meeting her was her graciousness, her smile, her reassuring cheery voice, and her good sense of humor – all qualities that helped her, to so effortlessly carry the relatively heavy burden of chronic pain in her lower limbs due to old injuries from a motor accident , which seriously interfered with her ability to move over the years, later metamorphosizing into the diabetes type 2 condition which eventually led to her death at an early age of 58 years of age.

As a devoted mentor and principled educator, she earned both my deepest respect and admiration for tirelessly employing her best efforts at all times to help me gain a meaningful educational experience, at a time when the education of girls in STEM (Science, Technology, Engineering and Mathematics) related fields was generally shunned and highly discouraged within our community. This meant that besides financial struggles, enormous obstacles had to be overcome and oftentimes at a considerably high psychological cost. Firmly anchored by her deep faith in God and in the transformational power of a quality education, she, however, stayed true to her convictions and never gave up hope of what I could become,

if the best in me, was nurtured, encouraged to grow and brought to fruition by access to the best instructors, research environments, and educational facilities in the world. It is her hard work, nurturing, prayers and consistent encouragement that saw me get a highly competitive research position at the Intelligent Transportation Systems Laboratory at the Graduate school of Engineering – Kyoto University and also be granted acceptance of residence at Kyoto International Student's House, HdB in Japan for the last three years. On to the very end, her presence was a constant, stabilizing force in my life. She was the metaphorical anchor that keeps a sailor steady amidst life's tumultuous tides. She gave me strength and purpose, joy and friendship and stood by me always. She conducted herself quietly, kindly, diligently and fully embodied the Christian ideals that; faith demands deeds and not just words and that our greatest and most acceptable prayer is a good life, wisely and nobly lived in service of the common good. It is thus, upon this simple but rich background that the inspiration of my scholarly work and the core philosophy of my life are interwoven into a neat tapestry, by which I firmly believe that the highest good that can be attained from one's higher education experience is the dutiful employment of skill to advance the condition of my neighbor and common good of the universe. Whether next door or halfway around the world, I understand and appreciate the fact that, there are millions of mothers like mine, whose most sincere efforts and hopes are daily, being expended towards inspiring a better and more equitable world for their children. Therefore, over the past few years, I have undertaken as my life's purpose to contribute towards the realization of such a world by harnessing the power of mathematical modelling and recent technological advances to, conceptualize and design urban public transportation systems through which; safe, affordable, efficient and eco-friendly transportation solutions ought to become a global standard especially for low income and marginalized groups in several cities around the world … a term referred to as Transport Equity.

Although the scholarly work is quite hard and extremely demanding, I have over the past three years derived much joy and satisfaction from diligently carrying on. In no small part, due to an extremely fortunate circumstance that was bestowed upon me in finding a highly supportive family and a home away from home, here at Kyoto International Student's House, HdB. As an exceptional haven for international scholars in Japan, HdB goes far beyond all the conventional definitions of a mere residence. It is a beating heart, the very essence of unity, wisdom, hope, faith, love and universality nourished by a vibrant community of highly talented, compassionate and intelligent individuals. Put into context, when I faced the profound loss of my mother, it was only four (4) days before a pre-scheduled academic conference in Hongkong where my scholarly work would make an international debut, therefore, beyond despair, I was plunged into a sea of total confusion. It was in that darkest moment when an extraordinarily miraculous light emerged from the heart of this remarkable community. The unparalled support extended towards me both emotionally and financially

transcends any language and form of human expression I know of, and I wish here to say that with all my heart, I am eternally grateful for such an extra-ordinary gesture of uncommon kindness that you all collectively extended towards me in managing and overcoming a potentially catastrophic academic setback. My deepest gratitude, first and foremost, goes to our Highly esteemed Director, whose personal contribution of 400,089¥ covered the air ticket expenses of my journey i.e., 296,740¥ from Japan back to Uganda and 103,349¥ from Uganda then to Hong Kong. Secondly, I would like to extend my heartfelt thanks to the dedicated individuals at the student office and the compassionate student team who, through their collective wisdom and efforts, generously pooled together 261,000¥ to assist with the funeral arrangements. It is here once again that I would like to say thank you so much all, for your kindness and all the level of effort, love and sacrifice you each undertook to help me come through. Your remarkable gesture not only fortified my mental and emotional defenses against the crisis, but also gave me renewed purpose and firm resolve to carry on more devoutly with my academic journey. To say in the least, your selflessness and kindness went beyond mere financial support; it became the lifeline that not only allowed me to navigate the crisis successfully but also enabled me to fulfill my solemn obligations to my mother of honoring a life well lived by giving her a dignified burial in accordance to African norms and tradition. Furthermore, your benevolence as well granted me the opportunity to attend the conference, where my life's work, until this point, highly inspired by my mother found its place on an international stage for the very first time. To this day, my sincerest gratitude to you all knows no bounds, and I pray everyday that the Good Lord blessedly continues the good work he has began in me, so that I may find myself worthy of that precious and extraordinary gift of Grace you bestowed upon me, for all the days of my life. May that Grace lead my mother home to find calm rest in the Good Lord. And may God in whom all good things are found without fail, continue to bestow his Grace and tender mercies upon you all, in all that you do, wherever you go. THANKYOU.

Please see attachments.

A) AMOUNT RECEIVED

Total of condolences received	
1. HdB House members	261,000¥
SUBTOTAL1	= 261,000¥ (**1772USD**)
Ticket fares	
2. KIX(Japan) – EBB(Uganda)	296,740¥
3. EBB(Uganda) – HKG(Hongkong)	103,349¥
SUBTOTAL2	=400,089¥ (**2717USD**)
GRAND TOTAL	=661,089¥ (4,489**USD**)

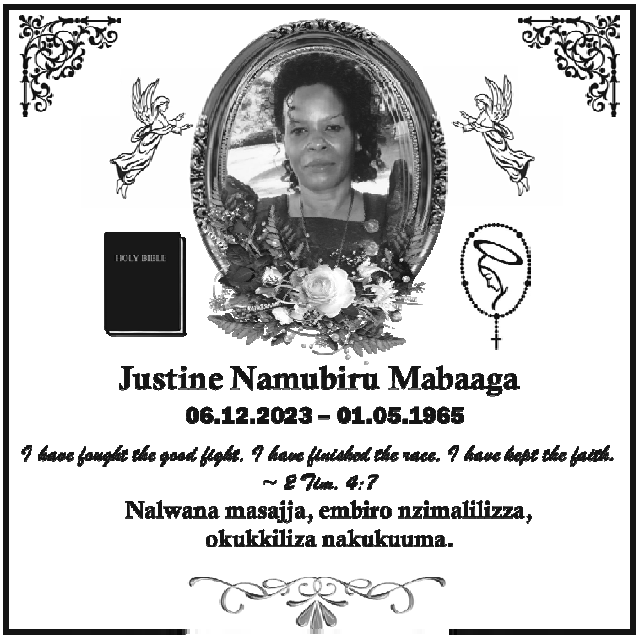
*7th /8th December 2023 conversion rates apply: 1 JPY = 0.006791 USD

B) BREAKDOWN OF EXPENDITURE

Total amount of cash at hand	261,000¥(1772**USD**)
1. A+ Funeral home services	4,090,000UGX (**1,083USD**)
2. Funeral Casket	1,300,000UGX (**344USD**)
3. 3 Outdoor tents, chairs and lunch for 200 guests on day of burial	1,303,030UGX (**345USD**)
GRAND TOTAL	=6,844,106UGX (**1812USD**)

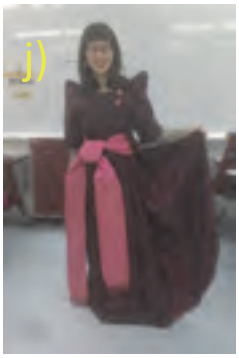
*7th /8th December 2023 conversion rates apply: 1 USD = 3776.90 UGX

C. MEMORIAL EPITAPH



1. 27th Hongkong Conference for transportation studies on Transport Equity

2. Ugandan Cultural HERITAGE



3. Earlier years

4. Later years

Photo Captions:

a) On my graduation day M. Eng program with a distinction at Kyoto University on 23rd March 2023. b) My name tag for the Hongkong conference. c) At the presentation podium. d) The conference audience i.e., over 500 research scholars.e) Discussing with my academic advisor during the poster session. f). Presenting my master's research during the presentation session. g) With my mother at a graduation ceremony in 2011. h). Coming of age ceremony at 20 in 2015. i), j) and k) Presenting the Ugandan cultural heritage attire to the elegant Japanese ladies during the November festival – 23rd November 2023. l)My Mother at Our Lady of Lourdes catholic Church, Nakasongola: Church in the background – 1993. m) My Father and Mother with me as a baby at an outdoor event – 1996. n) My Mother taking me for the infant immunization at Nakasongola Health Centre – Dec 1995. o) My mother posing for a photograph while carrying me at 1 month old with her friends' children infront of her first side business: an African hair beauty salon, seated 2nd right in green shirt is my elder brother, Franco – Dec 1995. p) Friends of Mum (Regular visiting – Young European Christian missionary volunteers at Our Lady of Lourdes catholic church) came to visit her when they heard she had had a baby. Seated 3rd from left, back row – is my mother carrying me as a baby – 1996. q) My mother and I taking a selfie on her visit to my undergraduate campus during Year II/IV, Makerere University, Kampala – 2012. r) My mother chatting at home after morning routine exercise – 2020. s) One of her last pictures at home, praying the daily Novena prayers with the Holy Rosary – 2023. t) Requiem mass at St Augustine Chapel. u) The mourner's Gathering and v) Burial at our ancestral village at Mpigi district, Uganda.

【OM 便り】

Sustainable？

村松　拓（むらまつ　たく）（日本）
（大学・学部）京都大学農学部

僕は 2005 年 10 月～2007 年 2 月、1 年半ほど HdB に在籍していた。その頃の僕は若く、大した能力もないものの何かを出来るはず、という根拠のない希望を胸に就職活動に臨んでいた。その時分の自分なりによく考え、自分のやりたいこと、出来ること、社会に必要とされることを考え、Forester になることを目標とし、日本の企業の中では 1 番大きな規模で植林事業を実行している企業に就職。ラオスで 4 年、インドネシアで 3 年、植林事業に携わることが出来た。その他のかなり毛色の異なる職務も経て、多くの人に助けてもらいながらなんとか会社員生活を全うしつつある気がする。
家族を得ることもでき、現在中学 2 年生の長女に時々塩対応されつつも概ね幸せな会社員生活を送ってきた。

僕は HdB で一年半、良い時間を過ごさせてもらった。そこで得られた基礎は社会人生活にとても役に立った、と考えている。
HdB の何が良かったのか？
多様な価値観に触れることが出来たこと、なのではないかと思う。
多様な価値観に触れるとはなんだろう？と考えると、
自分の場合は HdB で自分の常識と違う考えをもつ人と暮らすこと、だったように思われる。先述の通り、HdB にいた時の僕は学生で、自分には何か出来ることがきっとあるはずだ、と考えていた。その一方で不安も抱いていて、自分のパフォーマンスを縛るであろうことは何だろうか？と考えた時に、おそらく"常識" なのではないか、などと漠然と考えていたように思う。もしそうならば、"常識"は持たない方が良いのではないか？或いは自分の常識を疑うことが重要なのではないか。そんなことを HdB 在籍中はよく考えていた。

酒を飲まない人も結構な数、いた。
その人たちを巻き込みつつ、ソフトドリンクとかも用意しながらほぼ毎週飲み会を企画するチェアパーソンもいた。
徹夜で脳外科の手術に立ち会い、その後にクラブに繰り出す人もいた。その後で、これから朝一からまた手術立ち会いなのよ〜。とかのたまっていてシビレた。
100 人（200 人？）以上の人を集めて HdB でのクラブイベントを成功させる人もいた。
2006 年のサッカーワールドカップ優勝で準決勝勝利後、朝方にこいつ発狂したのかな？くらいな勢いで興奮していた人もいた。
毎晩のように本国に受付前の公衆電話から電話をかけ、日本人の倫理観は狂ってる、と泣いている人もいた。

どれが正しいとか間違えているとかではなく、色んな考え方の人がいるよね、ということをしみじみ感じることが出来たのが HdB で 1 番良かったことのような気がする。

最後に、
今の自分の価値観の大事な要素のひとつが、Sustainable であるか？です。

2024 年の 4/13(土)に HdB の卒業生、そして許されるなら現在 HdB 在籍の方も招待しての Gathering を企画します。卒業生との関係がこれからも Sustainable であること、そして在学生の皆さんに Inspiring な企画となることを期待しています。どうぞよろしくお願いします。

HdB 卒業生 村松 拓

Looking Back Forty Some Years
四十何年か振り返って

Ariyavisitakul Lek Sirikiat（アリヤヴィシタクル・レック・シリキャット）（タイ）
OM（1979−1981）京大・工（京大工博）米国・アトランタ在住

I came to HdB (Haus der Begegnung, “House of Encounter”) in 1979 after graduating from 東京外国語大学付属日本語学校 in Tokyo. I was accepted to this new place even though there were concerns during the admission interview about my young age (I was 18 years old). Most other residents of HdB at the time were either in their senior years or 大学院 (postgraduate). I did feel the age gap, but it was the academic gap that made me feel somewhat out of place.

My chores/duties at HdB included スポーツ当番, ダンスパーテイ当番, committee (Team) vice-chair. I cooked a few Common Meals. What I loved most was Music Evening, in which I frequently participated. I could play many Japanese and English songs on my guitar. Music appreciation would carry over to impromptu sing-along sessions whenever we gathered in someone's room to party. Music had the ability to break down cultural differences and magically bond us. Too bad I had to study, or it would have been PARTY everyday!

Study was excruciating, given the extremely slow speed at which I could read Japanese textbooks, which was made necessary by not being able to fully understand what the teachers said in class. The Study Room at HdB was a sanctuary in summer because it was equipped with a 冷房 (air conditioner) ! No PARTY there, of course...

To me, HdB was two things: First, it was the place where I came of age (青春). While living there, I learned to drive, to socialize with adults, and to be part of a very uniquely inclusive international culture. Second, it was the place where I first had REAL Japanese friends. Outside HdB, even a slight language barrier created 違和感 (sense of discomfort) that squashed any chance of making friends in school. The Japanese in general were very polite, but awkward with foreigners. The inclusive nature of HdB changed that.

My best mate at HdB was Havi (吉村一良). We had many things in common, both engineering majors, moderately outgoing, and loved the same kind of music. He had a very big collection of classic rock music! We loved going for ドライブ (scenic drives) visiting beautiful places in Kyoto, which left many fond memories. He taught me many valuable life lessons. Some years after I left Japan Havi became a HdB House Father. Our friendship lives on today, more than 40 years since we first met at HdB.

東京の東京外国語大学付属日本語学校を卒業後、1979 年に私は京都「国際学生の家」(HdB) にやって来ました。18 歳という若さだったため、入寮の面接で心配されましたが、この新しい場所に何とか受け入れてもらいました。その当時、HdB に住んでいた他のレジデントのほとんどは学部でも上級の学生か、または大学院生でした。年齢的なギャップも感じましたが、学力的なギャップに違和感を感じることも多かったと思います。

HdB では、スポーツ当番、ダンスパーテイ当番、チームの副委員長などを務めました。コモンミール (Common Meal) も何度か作りました。一番好きだったのは音楽の夕べ (Music Evening) で、よく参加しました。私はギターで日本語や英語の歌をたくさん弾くことができました。また、定期的ではなかったが、誰かの部屋に集まってパーティーをするたびに、ギターの伴奏で皆で歌を歌うこともよくしました。音楽には、文化の違いを打ち破り、私たちを魔法のように結びつける力がありました。残念なことに、国費留学生である私は一生懸命勉強をしなければならなかったわけで、それがなければ毎日のようにパーティーをしていたことでしょう！

私は日本語の教科書を読むスピードが極端に遅かったので、勉強は非常に大変でした。最初の数年間は、授業中に先生が言ったことを十分に理解できず、教科書を読んで理解することが必要だったから本当に大変でした。そんな私にとって、HdB の自習室 (Study Room) は、冷房が完備されていたので、夏には聖域でした！もちろんそこでパーティーはありませんでしたが...

私にとって HdB は 2 つの意味を持つ場所です。まず第一に、私が青春を送った場所だということです。HdB に住んでいる間、私は車の運転や大人の人との付き合い方を学び、色んなハウス活動によって、HdB の活発で包容力のある国際文化を体験しました。第二に、HdB は初めて本当の日本人の友達ができた場所であるということです。HdB の外では、わずかな言葉の壁さえも、違和感のようなものを醸し出し、学校などで友達を作ることがなかなかできませんでした。一般的な日本人は外国人に対してとても親切なのですが、何だかぎこちなさを感じるところがありました。HdB が持つ包容力はそれを一変してくれました。

HdB での私の親友はハビ (吉村一良) という人物でした。私たちは二人とも工学部の学生で、何となく外向的で、また、好きな音楽の好みも同じでした。彼は私が好きだったクラシック・ロックの最大級のコレクションを所有していました！私たちはドライブに出かけたり、京都の美しい場所を訪れたりするのが大好きで、今でもとてもいい思い出になっています。彼は私に人生で大切なことをたくさん教えてくれました。ハビは、ハウスとの関わりを続け、私が日本を離れてから数年後、HdB のハウス・ファーザーになりました。私たちの友情は、HdB で初めて出会ってから 40 年以上たった今も続いています。

トゥンジョク・A・メテ教授の HdB の記憶

内海博司
（HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965OM、元 HF）

昨年、トルコからの留学生であった OM のメテ教授（トゥンジョク・A・メテ教授）の教え子であるエルデミール・アリ・ヴォルカン先生が京都大学に留学された。彼は、メテ教授が日本語とトルコ語で著した「トルコ共和国における日本語と日本研究の 50 年」という冊子をもって、（公財）京都国際学生の家に尋ねて来られた。この件については昨年のイヤーブックに OM の西本氏が書いています。

実は、メテ氏も西本氏も私が HdB のハウスファザー（１回目）をしていた時の学生さんでした。彼の本の 78-79 ページに、京都ですごした HdB のことを**「日本の海に浮かぶ連合国」**と記されていたので、抜粋して皆様に読んでいただきたいと思います。

彼は、アンカラ大学の時に「トルコおよび日本の政治的近代化」という本を読んで、日本に興味を持ち、日本の奨学金を得て、京都大学法学部国際関係学科の高坂正堯教授のもとで勉強されました。日本で自分自身が日本語修得で苦労された経験から、京都大学で学位を取得後トルコに帰国、最初はボランチアで日本語教育のための「日本語授業」を始められたそうです。その後アンカラ大学言語歴史地理学部の日本語・日本文学部を開設し、本格的な日本語教育を始められた人物です。その後チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学の初代学長として日本語教育に力を入れられ、その後も、トルコにおける多くの大学での日本語教育に尽力を果たされました。その開所式には、三笠宮崇仁親王殿下が参加されています。更に、日本での研究を終えてトルコに帰国した学生達のための「帰国留学生会」や、トルコと日本両国の文化的活動を支える「土日基金」等の設立に努力され、日本とトルコとの文化交流を進めた大功労者です。

京都大学で研究を進めると決心してから、まず、住む場所を見つける必要がありました。学生寮が理想でしたが、この問題はしばらくして解決しました。私にとってすべての条件を満たす、京都「国際学生の家」（*Haus der Begegnung*）という寮に入れる可能性が見つかったのです。私の日本での研究生活の間、とても貴重な場所であったこの寮について少し語りたいと思います。

スイス東アジアミッション（*Switzerland Far East Mission*）と日本政府（外務省）が共同で設立し、一部の日本企業から財政的支援を受けているこの寮は、当時の他の学生寮とは異なり、完全に西洋式でした。部屋は 1 人部屋で、各部屋には本棚、クローゼット、ベッド、勉強机、洗面スペースがありました。シャワーとトイレは共同で、各フロアに共用キッチンがありました。最も便利な点は、寮は京都大学のキャンパスまで徒歩 10 分のところにあったことです。

この寮では、選ばれたスイス人家族と日本人家族が管理を行っていましたが、入寮生たちも寮の運営に携わることになっていました。Haus der Begegnung（Lief Together　and Encounter）の名の通り「アイディアを出し合い共に暮らす」ことを実践していました。入寮生の総数は40〜45人程度で、そのうち1/3が日本人、2／3が留学生でした。各国から最大3名までの学生が受け入れられ、国際的な雰囲気の中で生活を送りました。寮での使用言語は英語と日本語でした。月に一度みんなで料理を作って一緒に食べるコモンミール（Common Meal）というイベントがあり、各国料理を味わう機会にも恵まれました。ごく簡単に言えば、この寮は私たちに真の国際コミュニケーションの場を提供してくれたのです。

上に述べたことから、私はこの京都「国際学生の家」を「日本の海に浮かぶ連合国」と呼んでいます。

この寮に入るためには面接が必要でした。面接官には、スイス人と日本人の管理人だけでなく京都大学の教授と入寮生の代表者も含まれていました。私はこの面接に無事合格し、1970年10月に京都「国際学生の家」に入ることができました。

日本滞在中、私はこの寮で長い間生活しました。寮の設備と入寮生の国際的な雰囲気は、私が研究を続ける上で大きなサポートとなりました。もしここで生活できなければ、私は研究以外のことに多くの時間を割かねばならず、研究を行うことは非常に困難だったであろうことが容易に想像できます。

但し、幾つかの記憶間違いが記されています。例えば、「スイス東アジアミッション（*Switzerland Far East Mission*）と日本政府（外務省）が共同で設立し、一部の日本企業から財政的支援を受けている」は、「スイス東アジアミッション（*Switzerland Far East Mission*）を通してのスイスの民間人と日本の民間人の寄附で設立し、スイス東アジアミッションより財政的支援を受けていた」が正解です。また、入寮生の総数は40〜45人程度というのは、寮生は32人で、その他は当時の呼び名であるゲスト研究者が10人前後でした。

【ハウスペアレンツとレジデントより】

2023 年度　公益財団法人京都国際学生の家　Events List

HF 山本慶一

毎年恒例の IFF は、食の安全性確保と遠方からの招待者に配慮して、従来の開催時期と時間を、行楽の秋でお昼の時間帯に変更して実施致しました。また感謝祭も同時開催と致しました。

当日は暖かい秋晴れに恵まれた中、HdB をご支援くださっている皆様やご近隣の方々、学生たちの友人などを含めて 100 名近くの招待者がご出席くださいました。

庭園に設けたテーブル席も直ぐに満席になるほどの盛況で、Residents が創る 5 か国の料理や HdB 特製のソース付きみたらし団子は､時間内にほぼ完食となりました。また Residents が今年庭園の梅の木から採取した梅で作った梅の果実ゼリーやデザート類も好評でした。感謝祭では Residents のパーフォーマンスも多くの皆様にご観覧いただき、最後はアイリッシュダンスを一緒に踊り、賑やかで楽しい幸せな一時を過ごすことが出来ました。

更に今年初の試みとして、Resident 有志による Orienteering を企画。HdB 周辺の名所、観光人気スポットをチェックポイントとして男女混合 3 チームで制限時間内のポイントゲット数を競い合いました。競技中は、逐次他チーム情報を知ることができるので、競技終盤は勝ちを意識して盛り上がりました。

来年は公式イベントの候補かも？　翌日は確実に筋肉痛になりました。

☆ **1st Semester**

Chairperson: Marina　ViceChairperson: Kota　Secretary : Suguru　Accountant : Mai

Date		Event
April	07(Fri.)	Welcome Party
	21(Fri.)	Common Meal (CM1) & Workshop (WS1)
May	13(Sat.)	One day Trip (Cupnoodles Museum & Spa)
	26(Fri.)	Common Meal (CM2) & Workshop (WS2)
June	17(Sat.)	Public Forum by Old Member Club , Common Meal (CM3) & Workshop (WS3)
July	02(Sun.)	One day Trip　(Ohmimaiko beach & BBQ)
	07(Fri.)	Common Meal (CM4) & Workshop (WS4)

August	04(Fri.)	Common Meal (CM5) & Workshop (WS5)
	05(Sat.)	Big Cleaning Day
	06(Sun.)	Firefighting Training*
September	17(Sun.)	Welcome BBQ*
	24(Sun.)	Japanese Garden

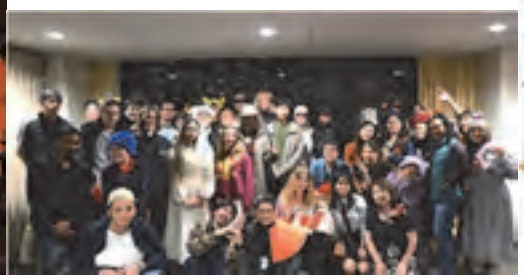
* Resident 有志による自主企画イベント

☆ 2nd Semester

Chairperson: Naomi　ViceChairperson: Kento　Secretary: Alubin　Accountant: Eringi

Date		Event
October	06(Fri.)	Welcome Party
	27(Fri.)	Common Meal (CM1) & Workshop (WS1)
November	10(Fri.)	Common Meal (CM2) & Workshop (WS2)
	26(Sun.)	International Food Festival(IFF) & Thanksgiving Day
December	8(Fri.)	Common Meal (CM3) & Workshop (WS3)
	10(Sat.)	Sports day (Orienteering)*
	22(Fri.)	Christmas Party
January	12(Fri.)	Common Meal (CM4) & Seminar(WS4)
February	9(Fri.)	Common Meal (CM5) & Workshop (WS5)
	11(Sun.)	Big Cleaning Day

* Resident 有志による自主企画イベント



HdB での３カ月

安里泰貴（アサト・タイキ）（日本）
京都大学大学院経済学研究科グローバル経済・地域創造専攻２年

私は、京都大学経済学研究科で修士 2 年を過ごしている。HdB へは今秋から入居を開始し、はや 3 カ月が経とうとしている。修士が終了する来秋まで入居する予定である。HdB は日々学生交流を目的とするイベントが多いため、入居してまもない私でも既に第二の故郷のような温かさを感じることが出来ている。

これから多くの思い出を形成していくと予想するが、これまでの活動で印象に残っている点は International Food Festival と Thanksgiving のイベントである。これらは私が当番として関わったイベントである。もちろん当日多くの来場者にお越しいただき交流できた点も私の心に残る瞬間である。しかし、それ以上に私が HdB の歴史の深さを感じたきっかけは、近隣住民へのチラシ配りであった。ハウスペアレンツと一緒に HdB に隣接するお宅へと訪問しチラシ配りをする際に、多くの近隣の方々が「最近は学生は元気ですか？」や「あの頃は～」等と過去の思い出を共有してくださる場面が何度かあった。HdB はまさに地域の方々のお陰で成り立ち、これまで残ってきたんだという時間の積み重ねをしみじみと感じられる、そのようなチラシ配りであった。

さて、現在の学生には HdB が過去から受け継いできた理念などが継承されているのだろうか。これは、現在入寮している私にも大きな疑問として投げかけられる。私も今後修士研究などに追われイベントへの参加などが難しい場面などが出てくるだろう。その際に、どのように HdB が掲げている「世界平和への貢献」という側面へ協力できるのか、残りの期間じっくり考え、他の学生と共に取り組んでまいりたい。

Report HdB

Lisa Bachmann (ドイツ)

NCC Center for the Study of Japanese Religions

First, I want to say thank you to all members, our houseparents, and the organization and office team of HDB. I am glad and thankful to live in such a fun place with lots of friendly

people. I arrived in September 2023 in Kyoto for my studies at the NCC (National Christian Council) Study Centre of Japanese Religions and will live here until February 2024. For me, HDB is a nice place to practise Japanese every day, meet with friends, and enjoy time together. I have felt welcome since my first day. This place is a good opportunity to come together, learn from each other, and ask questions. For me, it is kind of crazy that I am living in Japan for the first time in my life with people from so many other countries, for example, from Madagascar or Thailand. This place allows me to learn much more about different cultures and traditions. We enjoy together preparing meals, playing games, and going on little trips, like to a nearby Matsuri or to look at fujibakama, a famous flower in the late summer. Since I have lived here, I have never felt alone and have made some good friends. I appreciate the opportunity to have nice conversations and friendly interactions. Furthermore, the opportunity to use sport vessels, like the table tennis plate or the billiard table, is very nice, and I like the sport corner too. All in all, I am really looking forward to the coming adventures until I must go back to Germany.

HdB ― 新たな我が家

茶谷悠太（日本）
京都大学 教育学部

私が HdB に住み始めてから、年末で３ヶ月になる。おそらくいま寮で一番の新参者だ。そんな私が長い歴史を持つこの寮についてああだこうだと私見を並べるのは、なんだかおこがましいような気もするが、長い寮生活の事始めに、この一癖ある我が家に飛び込んできた感懐を書き留めておこうと思う。

HdB になぜ入ろうと思ったのかと考えてみると、まったくもってノリとしか言いようがない。深夜に誰もいない文学部棟でレポートを水増ししていた時に、壁に貼ってある“Call for new residents”のポスターが目に入った。そういえば今の家は隙間風がひどいしなぁ、などと考えながら読んでみると、どうやら日本人と留学生が一つ屋根の下で暮らすという、なんとも夢のある寮らしい。そんなところに住めたら、どんな刺激的で楽しい日々が待っているだろうか。レポートの提出期限に押されて現実逃避が捗った。そしてそのままの勢いで、面接に申し込んだ。

それからの日々は、振り返ってみる間もないほどあっという間だった。まず入寮前

に参加したイベントで、レジデンツの多様性に圧倒された。大学で見慣れていた、同質性に数本毛が生えたような「多様性」ではない。本当にまったく違う人たちが、文化や常識すらも共有しないまま一緒に暮らしている、その光景に私は強く興味をそそられた。入寮してからは、ただ普通に生活しているだけなのに毎日新しいことがあって、気がつけば友達ができ、思い出ができ、いつの間にか「我が家」と思うようになっていた。あの日の現実逃避が現実になったようで、不思議な心地がする。

先日、大学院生が研究のためにHdBを訪ねてきた。私もインタビューを受けたのだが、一番考えさせられたのが、「この寮に住むことの良さは何か？」という質問だ。残りの少ない紙面で、２つ挙げておこうと思う。これからみんなと日々をともにする中で、きっともっと増えていくだろう。

1. みんな違うということ。「日本人ならこうする」みたいな暗黙のルールはこの寮には通用しない。だからこそ自分らしくいられる。それがとても居心地が良い。

2. それでも、皆が皆のことを思い遣っているということ。なぜだか分からないが、みんなとても暖かいのだ。それが私の中でHdBをHdBたらしめているものである。

HdB Reflection

Edward Foxhall（British）
Politics, Philosophy and Economics (BSc.), the University of Warwick

In the last few months in Japan, I have come to understand Japanese culture and language far more than I could have thought originally. As my Japanese has improved to a poor yet passable standard, I have begun doing something I did not think possible at first – making Japanese friends at Haus Der Begegnung. Through participation at common meals, holiday parties and loosing to Alvin or Kota at pool, I can truly say that HDB has helped me to try and understand Japan and appreciate my Japanese friends. Nevertheless, I think my broken Japanese is reflective of my time so far in Japan and at HDB– food, sport and socialising. It is the Japanese I learnt organically through my everyday life here that I continue to use and rely upon to integrate more fully into Japanese society; and for this I am very grateful to my teachers – my Japanese friends at HDB.

ここ数ヶ月、日本での経験を通じて、私は元々考えていた以上に日本の文化と言語を理解するようになりました。私の日本語のスキルは未だ未熟ながらも通用する水準に向上し、初めて考えたことができるようになりましたーそれは、ハウス デア ベ

ゲグヌングで日本の友人を作ることです。共通の食事やホリデーパーティーへの参加、そしてプールでアルヴィンくんや康太くんに負けることを通じて、私はHDBが日本を理解し、日本の友人を大切にする手助けとなったと断言できます。それにもかかわらず、私の不完全な日本語は、これまでの日本での経験とHDBでの時間を反映していると考えていますー食事、スポーツ、そして社交を中心に。ここで日々の生活を通じて自然に学んだ日本語こそが、私が日本社会により完全に統合するために続けているものであり、そのためには私の先生であるHDBの日本の友人たちに深く感謝しています。

好きな映画について

深沢健人（日本）
同志社大学大学院法学研究科政治学専攻修士1年

HdBに来て一年近くがたつ。何を書こうか迷い昨年のモノを見ると、本当にいろんなことついて書いてあった。そこで僕も例に漏れずに好き勝手に書こうと思う。
そこで僕は、好きな映画について書くことにした。

僕は映画が好きで、様々なものを見る。2023年はモンゴル映画にハマり、いくつかのタイトルを見た。僕の指導教授に言わせれば映画はいつも「眺めのいい部屋」である。そんな僕のお気に入りは『ロッキー』だ。

ロッキーの何が好きか。それは、あんなに感情移入を誘いながら前向きにさせてくれる作品は他にないからである。

ロッキーが作られた時代は、1960~70代半ば。アメリカン・ニューシネマ全盛の下につくられた。この時期の映画は総じて暗く・バッドエンドなのが特徴だ。この時代のアメリカは、ベトナム戦争や公民権運動、カウンターカルチャーなど、多くの社会的・政治的変動が起こっていたため無理もない。アメリカが傷つき、自信を無くしていた頃なのだ。

このような背景を踏まえると、ゴロツキとして金の取り立てで生計を立てる、うだつの上がらないロッキーは、正にこの時期のアメリカといえるだろう。こんなロッキーについ僕は、悩んでばかりでなかなか前に進めない自分のことを重ねてしまう。

だからこそロッキーが好きだ。自分で人生を変える決断を行ったロッキーが、それを形にするための努力に全力を尽くすロッキーが大好きだ。

自分を重ねてしまいがちだからこそ、とんでもない勇気をもらえるのである。

ちなみにロッキーはアカデミー賞作品賞・監督賞を受賞し、アメリカン・ニューシネマの終焉を決定的にした他、ホームレスを経験するなど苦しい思いをするスタローンを一気にスターダムに押し上げた。

こんなところも好きだ。ポジティブで前向きなものにつつまれたロッキー。
もし HdB のみんなに辛いこと、悲しいことがあれば、僕はロッキーを持ってどの部屋へでも飛んでいきたいと思う。

Recipe for a Semester at Haus der Begegnung (HdB)

Anneke Gerken（ドイツ）
NCC Center for the Study of Japanese Religions

Ingredients:

- 1 cup of Cultural Fusion
- 2 tablespoons of International Bonds
- A pinch of Halloween Spirit
- 5 cups of delicious common meals
- 3 cups of Laughter and Fun

Instructions:

1. **Prepare the Atmosphere:**
   - Begin by immersing yourself in the unique ambiance of the Haus der Begegnung (HdB) – consider hosting a wonderful BBQ at the end of September. Instantly, you'll find yourself transported to the heart of Japan, feeling the warmth and hospitality that makes you feel right at home.
2. **Mixing the Ingredients:**
   - Gently fold in the diverse array of international students. The rich blend of cultures creates a harmonious mix, fostering a sense of belonging and appreciation for global perspectives. This infusion adds a distinct flavor to the overall experience.
3. **Building Connections:**
   - Stir in the opportunity to connect with fellow students from around the world. The HdB serves as a meeting ground, where friendships are forged, and cultural exchanges

become second nature. The shared experiences create a strong foundation for a global network.

4. **Adding a Dash of Halloween Magic:**
    - Sprinkle the Halloween party into the mix. The atmosphere transforms into a playful and enchanting space filled with laughter and creativity. The diverse array of costumes makes it a memorable celebration. Serving suggestions: Go to a club afterwards and dance until the night is over.
5. **Letting it Simmer:**
    - Allow the interactions and relationships to simmer over the course of the semester. The sense of friendship deepens, and the collective experiences become the soul of this unique semester recipe.
6. **Savoring the Results:**
    - As the semester unfolds, savor the delightful taste of a truly enriching and fulfilling experience. The blend of Japanese and international students adds layers of depth, making this semester a highlight in your academic journey.

Conclusion: In the kitchen of Haus der Begegnung, this semester has been a delightful concoction of cultural richness, international connections, and festive celebrations. Like a well-prepared dish, the mix of Japanese and international students has added a unique flavor to the overall experience, making it a semester to be cherished for years to come.

Arriving

Clara Heitmann (Germany)
Interreligious Studies in Japan Program at NCC Center for the Study of Japanese Religion

The first important memory I have regarding HdB is the barbecue in September. I will describe this experience as it was a very important one in showing me what living in the comunity of HdB can mean.

I still had a jet lag, wasn't used to the heat of Kyoto's Septembers yet, but very impressed by convenient stores. We were greeted with smiles, German words and time for explanations. The sun was shining on the green of the garden and the stone of the big lantern. Some residents were sitting together, smiled and we began some shy small talk. The grill smelled like summer and there was even extra food prepared for us vegetarians. We were shown German wine and umeshu, talked about studies, travel plans and Heidelberg

and in that way got to know each other. All of the time there was a notion of fear because of the box in the corner, which was filled to the brim with water bombs. It got darker, candles were lit and we moved from conversation to conversation. Slowly I began to feel that I had arrived and that I could stay here for half a year. Quite suddenly people started to clean up. I guess that was only to distract everyone from the water bombs, because when I thought that the party had ended now, someone started the fight. It was only three minutes and only two people got wet, but they really did. To end the evening with karaoke was probably the best thing to do.

A Year at HdB

Bonilla Hoshikawa (United States/Dominican Republic)

Kyoto/Faculty of Law

I am a research student in Kyoto University's Faculty of Law department. I entered HdB in April 2023 and plan to leave in 2024. I came to Japan for education, to learn Japanese and do research with a professor. I didn't expect I would connect so well with the community at HdB.

I enjoyed many aspects of life here, but I loved working together with the other residents to plan events. I was a common meal toban and then chairman, so I got acquainted with most of the residents and how they work in a team. I was satisfying a meal or experience that

people could enjoy after so much time in school. I also met many more alumni than I expected. They were spread out across the world, but when they visited Japan they returned to HdB. I liked speaking with them and learning about their time in HdB and where they went afterwards. Now, I feel like I belong to a global network of international students. Thank you to everyone for making this year unforgettable.

留学の延長のような HdB での生活

Anju Kato（カトウ　アンジュ）（日本）
京都大学工学研究科建築学専攻

2022 年 9 月からの一年間のスイスでの交換留学を終えようとしていたとき、たまたま HdB の寮生募集のメールを受け取り、迷わず申し込みました。残り半年しか京都で暮らさないのにも関わらず家具を揃えるのは難しいこと、スイスでのシェアハウス生活が楽しかったため、京都でもそのような暮らしを続けたいと思っていたこと、英語を話す機会を失いたくないということ、そして何より、色々な文化や価値観の中で育ってきた人から刺激を受けながら生活したいと思っていたこと。私が京都での最後の学生生活に求めていたことを全て兼ね備えていたのがまさに HdB でした。

寮で出会った人は本当に様々で、優しくて思いやりのある人々ばかりでした。イベントだけでなく、プライベートでも一緒に遊びに行ったり、帰ってきて今日一日あったことの話を聞いてくれる人がいる環境はとても楽しかったですし、心強くもありました。修士論文が忙しく、全てのイベントに積極的に参加できなかったことが残念ですが、それを理解してくださり、応援してくださった寮の関係者の皆さんに感謝申し上げます。

HdB で過ごしたことによって、より京都への愛着が増しましたし、色々な国から来た寮生たちとの繋がりを通してその国それぞれに対する理解や親近感を得ることができたことも大きな財産です。4 月から社会人になりますが、卒業後も HdB で学んだことや感じたことを忘れずに過ごしていきたいと思います。

A Dialogue between Buddhism and Christianity

Dennis Benjamin Kenneweg (Germany, EU)
NCC Center for the Study of Japanese Religions

During my stay at HdB in Japan, I had the chance to observe some interesting things about the differences between Buddhism and Christianity.
Buddhist temples and Christian churches both use bells but the location and functionality of those bells are different. A Christian bell normally is hit by a bell tongue located inside of the bell. However, a Buddhist bell is struck from the outside. But can we really move on that quickly? Isn`t there any significance in the different workings of the bells in Buddhism and Christianity? Maybe they reflect a difference in how those two religions get things to sound, how they, so to say, hear the sound of reality. In Christianity, the thing is shaken until it gives away its secret sound located deep inside, while in Buddhism there is nothing inside and the sound of the thing is generated by someone hitting against its emptiness. In Christianity, it may be said that there is a reason why the thing can only be struck in such a way: Christianity has located the thing, the object, that is: The bell, far away, on top of the church tower, in God`s domain, so to speak, so far away that man can do nothing but desperately tug on a rope connecting him to the far-away object, thereby moving (and in actuality quite shaking up) said object. Is it too much to say that ringing a church bell in the Christian style works analogous to praying, to moving God in Heaven with a prayer? To shaking God up until He gives away a sound? In Buddhism however, the object of emptiness is situated on the ground, in the temple, on the human plain. It is there for everyone to see, to walk around, to touch and even look inside, an object among other objects, a void amidst a world of void. When striking the Buddhist bell with a big bar from the outside, the bell isn`t shook very much. I tried sounding such a bell at Hiei-san: In actuality, you have a greater difficulty of getting the bouncing and swinging bar back under control. It`s like you yourself are shaken up by the backbounce of the experience of suddenly “hearing” the sound of the emptiness of the world in front of you.

I may think about those themes some more. These are just some first thoughts. Please, I hope you understand

生きている茶室

久我英（日本）
京都大学総合人間学部

私は大学で文化人類学を学んでおり、現在は数寄屋建築の工務店を題材に卒業論文を書いています。私は幼いころから古い建物を見学することが好きで、よく古民家園に通っていました。また職人仕事も昔から好きで、長じて今のような卒業研究を書くに至りました。日本では大工は職人の代表格として親しまれていますが、実は建築とはかなり特殊なものづくりであるといえます。建築の特殊性としてはまずはその規模の大きさが挙げられます。また大きなものをつくるため、集団での仕事が必要とされていることも特徴でしょう。私は建築の面白さとは、空間をつくる営みであること、そして集団的な営みであることの二つに集約できるように感じています。

人類学の一つの分野に建築人類学と呼ばれるものがあります。建築人類学では長らく東南アジアの民家建築が盛んに論じられてきました。私は建築人類学の様々な研究の中でロクサーナ・ウォータソンという人の書いた『生きている住まい』という本が一番好きです。ウォータソンは以下のように述べています。

> 「建築」するということは、単にさまざまな要素からシェルターをつくるというだけではなく、社会的、象徴的空間―空間というのは、その創造者や居住者の世界観を写しだすと同時にそれをかたちづくるものだ―を創造することでもある。（ウォータソン　１９９７　ｐ１１）

ウォータソンは、建築とは住まう人の世界観を凝縮したミクロコスモスであることを説きました。また彼女の議論で特に面白いのは、東南アジアの様々な地域の人々にとって住まいは生きているのだと指摘したことです。彼女は様々な地域で家屋の各部位が比喩的に人間の身体と同じように呼称されている例を挙げてこのことを説明しました。つまりは家屋にも顔や口があり、胴体の中には空洞があって、人間と同じように生きているとされているということです。ウォータソンによると家屋の「生命力」は人々が住み続けることによって再生産され続けられ、最終的にはいつか家屋にも死が訪れるのだそうです。

私の卒業研究に深く関係している数寄屋建築とは、茶室と茶室を源流とする和風建築の総称です。数寄屋建築は茶の湯という特殊な文化的営みと切っても切れない関係にあり、またとても高級なものでもあるので、東南アジアの素朴な民家建築とは性質の異なる建築であるといえるでしょう。しかしウォータソンの議論を踏まえたとき、両者は深い次元では繋がっているように思えてなりません。

茶室は都市空間のなかに山中のような別世界をつくりあげることを意図しており、田園山間的な民家建築のモチーフが取り入れられています。また茶室は古の茶人の

世界観、感性を追体験できるミクロコスモスとして現在まで伝えられてきました。その佳さは実際に中に入って時間を過ごしてみて初めてわかるものです。茶室に入ったとき、我々の身体は茶室と感応し、さらに茶室を通して古の茶人とも感応しているのだと思います。そのような意味で茶室も生きているのだということは可能なのではないでしょうか。

（引用文献；　ウォータソン,R.　1997　『生きている住まい　東南アジア建築人類学』　布野修司訳　学芸出版社）

HdB の生活

Ng Dong Lam(香港)
京都外国語専門学校

こんにちは、アルビンと申します。まだ一年経っていないけど、HDB で毎日楽しく過ごしています。日本に来る前に寮で住むと思わなかった、北海道にすんでいる親戚の紹介で HDB の面接をし、そして合格して、HDB で住むこになりました。

2023 年 4 月私は日本に来て、HDB の生活が始まりました。最初 HDB に入った時いろいろ慣れないことがありました、トイレとシャワーの共用、イベントのこと、寮の人と喋るなど。私は日本に来る前に家族と一緒に住んでいて、生活のことも全部家族がやってくれました。だから日本に来て、一人生活を始めて、慣れないところがたくさんあります。その中で HDB のスタッフや寮生とても親切で丁寧にいろいろ寮のこと説明してくれました、そしてしばらくの間で寮生活を慣れ始めた。

HDB で生活するによって趣味や性格がいろいろ変わりました、性格は元々内向的で喋るのがあまり好きじゃない、友達もあまり作れない私が外向的になって友達を作るのも好きになって、趣味もいろいろ増やしました。卓球、ビリヤード、撮影、料理、ピアノ、カラオケなど、元々は香港にいる時はゲームしかできない私は HDB のおかげで興味を持つことがどんどん増やしています。

HDB で一番印象残ったことは始めての One Day Trip です。なぜかというと そのイベントは始めて寮生と深く交流できる機会でした、その日は大阪のト リップで最初はカップヌードのミュージアムに行って、そして博物館に行って、温泉に入って、最後一緒に晩御飯食べました、その日から寮の人と馴染 め、友達いろいろ増やしました。そしてその One Day Trip は始めて HDB の当 番として仕事した、経験も積み増した。

最後に、これからも HDB の生活を楽しめ続けたいと思います。新しい寮生 にもいろいろ教え、HDB を素晴らしい寮というイメージ続けたいと思います。

Reflections on the first year of life in HdB

Ryosuke Meki（目木涼介）（Japan）
京都大学工学部

One year will passed soon after I came to HdB. I got accustomed to live in HdB. There are many good memories like trip, barbecue, Halloween party, common meal. All were fun. I talked with residents a lot through these events and found new things about residents' country and I wanted to visited their countries.
I don't know what I have changed after I came to HdB but I have come to feel comfortable to stay with other people. Before I came, I was worried about living with others because I wanted to spend time alone too. (Of course, I like to spend with friends)
However, now small talk with residents in kitchen, bathroom and going to public bath and so on are one of my fun things in my daily life. I realized again the relationship with people makes my life better.
I will live in HdB next year. It is happy for me. I will become a fourth-year student and must study for exam of graduate school and start to do research so I will be busier than this year. I learned the relationship with people is important, so I join in events in HdB actively and make good relationships with residents even though I am so busy.
I look forward to what I will think and feel in the second year life in HdB and write an article fo the yearbook next year. Moreover, I hope my English skills will be better and write it in English better.

研究手帖として
−僕が「ジェンダー」を語る時に思うこと−

宗岡泰斗（日本）
同志社大学　文学部文化史学科

僕の場合、物心ついた時から、数字の “1” なら「赤」、ひらがなの “か” なら「男性」、という風に、目に見える情報に加えて、全く関係のない、ある特定のイメージがぴったりとくっついて頭の中に浮かぶことがある。最近知ったことだが、脳における統合認知的学問の世界では、これを「共感覚（シナスタジア）」と呼ぶらしい。そしてそれは、歳月を重ねるにつれ、個人的に自明なものとして「常識」化

されていくのだという。これは僕だけに限った現象だけではないらしく、あらゆる人が成長する過程で、多少の差異はあれど、無意識的に身につけていく能力でもあるのだそうだ。その知的で色気のある単語に心惹かれて Google で検索にかけてみると、ある人は音に味覚を感じたり、ある人はアルファベットに性格を感じたりするらしい。

仰々しい官服を纏う源頼朝に、アルプス越えを試みるナポレオン。教科書に載る歴史上の偉人たちは、いつもいつも男性ばかりだった。誤解を恐れずに言うと「歴史上、重要な役割を担うのは、いつも男性ばかりだった」ような気さえする。ジェンダーを取り扱う学問の入り口は、いつだって「常識の再考」から始まる。「なぜ誰もが知る歴史画には、男性ばかり描かれるのか？」、「男性はいつから・なぜ髪を短く切り揃えてきたのか？」、「女性はいつから・なぜスカートを履くようになったのか？」、「性別によって、社会における役割が規定され始めたのはいつからか？」、そして、「トイレのピクトグラムは、なぜ男性が『青』で女性が『赤』なのか？」。このような、当たり前過ぎて無視され続けられてきた「常識」を改めて見つめ直すことが、この学問の出発点なのだ。

現代においても、職業、言葉、ファッションに至るまで、その根底には簡単に覆せないジェンダー規範が重々しく存在している。普段私たちが当たり前として受け入れているはずの「常識」さえも、先入観と誤解が生み出した、緩やかな「偏り」なのかもしれない。そして、それに無意識に共鳴する私たちが、歪んだ規範を知らず知らずなぞり書きしてしまう可能性も多分にある。結果として、既に存在するイメージを、より極端で明確な「偏り」にしてしまう可能性だって否めない。司法は「成人した男女が愛し合うこと」を自明のものとしてきた。「結婚」という制度には、必ず「男女」の裏打ちが必要らしい。事実、現在の日本では同性婚さえ認められていない。

性転換を決断した若いタレントが自死を図った報道を見る。旧ジャニーズ組織内の性加害を取りまく不祥事の報道を見る。SNS とメディアで取り沙汰されるのは、いかに彼らが私たちの「常識」からかけ離れ、異質であったかを知らしめるものばかりである。他方、彼らが性的マイノリティだったが故に受けていた窮屈さや性の行き場の無さには、歩み寄る気配すら感じられない。彼らが望んだことは、無理やり「LGBTQ」の中のアルファベットに当てはめられ、無条件かつ大袈裟にアイデンティティを規定されることでもなければ、世間から卑屈になり、隠れて自身の性傾向に囚われ続けることでもないはずなのに。代替の効かない一人の人間として、多数派と同じように、得られるべき権利を求めていただけかもしれないのに。

性的暴行を巡る悪質な手口や行為の全てを肯定するつもりはない。ただ、「常識」的な性愛以外の文脈で語られる、”愛の形”を想像できる余白みたいなモノを、心のどこかに少しでも残しておきたいと思うだけだ。

「ジェンダー」という研究領域に興味を抱くきっかけは文学だった。自分以外の性を自覚する時、そこには常に物語の世界からの問いが投げかけられてきたように

感じる。樋口一葉や夢野久作、トニ・モリスンに村上春樹、そして尊敬する西加奈子が描く小説たちが見つめるのは、いつも「常識」の裏側である。(村上春樹著、『海辺のカフカ』では、僕の大好きな登場人物「大島さん」が、男女概念の成り立ちと関係性について、ギリシア神話を用いてユーモアたっぷりに説明している場面があるので、興味があったら是非読んでみて下さい。きっと大島さんのことを好きになるはずです。) 世の中には、大きな網の目からこぼれ落ちる人たちが確かに存在する中で、その原因となる不平等さや不公平さを考え直す機会を、文学は常に僕に与えてくれる。そして大抵の場合、物語は彼らを肯定し、尊重し、最終的には輝かせてくれる。僕はそんな物語たちから、曖昧さや不完全さを恐れず、また、それを直視する勇気をいつも貰っている。

ジェンダー史研究は、それ自体がまだまだ歴史の浅い分野である。そのため、新しい提言と価値の見直しが、今なお続いている。時に矛盾を抱え、葛藤し、身体性の絶対みたいなものに拘束されているような気持ちになることもある。でも、だからこそ得られる新たな発見や気づきの連続と、なにより、その歪みを突き詰めることのやりがいが、僕をこの分野研究に没頭させている。

「常識の再考」。ジェンダー研究におけるもっとも基本的で重要な視座は、今や学問的な意義を超え、僕自身を見つめるための糧になりつつある。

ちょうど 10 年前に逝去した The Velvet Underground の Gt, Vo,ルー・リードが 1974 年のオーストラリアでのライブ後、記者からこんな質問を浴びせられる。
—「(記者) あなたはトランスジェンダー？それともホモセクシュアル？」
答えて、
—「(ルー)、、、時々ね。」

半世紀も昔のロックンローラーの言葉に励まされながら、いつか「ジェンダー・セクシュアリティ」という言葉が意味を持たなくなった未来のことを、あらゆる人にひらかれたこの街で、この家で、おぼろげに考えてみたりしている。

My special time in Kyoto and at the „*Haus der Begegnung*“

Chris Müller(ドイツ)
NCC Center for the Study of Japanese Religions

For the first time in my life, I have been away from my home, the Ruhr area in Germany, for longer than ever before.And I am very lucky to have come to a place where I have been

welcomed hospitably and where there are people from Japan and all over the world with whom you can live, dance, cook, eat, celebrate and have fun together. It is truly a "house of encounters". Although this is the fourth time that I have been able to visit Japan, this time in Kyoto is a very special one. Not only will I be spending a total of almost six months in Japan, but living and studying together in Japan's cultural capital is something completely new and Veryexcitingforme.Since I arrived at the HdB together with the five other theology students from Germany in September, we have seen and experienced a lot together. I'm thinking in particular of the Common Meals once a month, the workshops, the welcome BBQ, the Halloween party, the International Food Festival, karaoke evenings and wild clubbing late into the night.

I am grateful for the delicious cheese spaetzle from Clara and Anneke, the in-depth theological lectures from Dennis and Falk and that I was able to introduce all the students in the HdB to German mining culture together with Lisa. I am also grateful for the funny Irish dance exercises led by Selma, the many photos taken by Albin and the delicious tacos made by Damian. I'm also grateful for the funny conversations in the sometimes more, sometimes less tidy kitchen on the second floor together with Anlii and others, for Kento and Kota's language tips on Japanese youth slang, Naomi's initiative to go and buy (more alcoholic) drinks after the Common Meal, for being a bartender with Taito at the IFF, for Ludo's antipasti at the Common Meal and probably the funniest moderation of a workshop held by Edward. And of course many thanks to Ayano for this wonderful yearbook and all the dedicated

helpers in the Tobans, you are great!

Last but not least, would like to thank the house parents, Mrs. and Mr. Yamamoto, and the two from the office, Ms. Noriko and Ms. Yoko, for all their commitment during all events and also during a short period of illness, thank you for taking care of us!I wish everyone at the *Haus der Begegnung* a good time and good luck and success for the future in Japan and all over the world!May the German-Japanese friendship continue to be great and bright in the future!

ありがとうございます．また会いましょう!

Glück Auf! グリュックアウフ! December 2023

パンを求めて

Nakano Erika（ナカノ エリカ）（日本）
京都産業大学 理学部

大学に入ってから始めたことは何であろうかと、本稿を書くにあたりこの 3 年弱を振り返ってみた。一人暮らしから始まり HdB に来て寮生活を経験し、その傍ら大学ではキャンパスや天文台の案内、フラメンコなど幅広く手をつけてきた。様々ある中でも今回は趣味の一つであるパン屋巡りとそこで感じたことについて記す。

▲山登りのお供に山の麓のパン屋で購入

きっかけが何であったかは記憶にない。ただ、地元静岡と違い混雑する電車とバスに耐えかね 1 年次の秋から自転車通学に変えたが、それが無かったら始めていないだろう。この 2 年半ほどで訪れた京都のパン屋は 64 店舗に上る。正直数えたときは驚いた。どのように数えたかというと訪れたパン屋の名前を毎回メモに残していたので振り返ることができた。メモを残す際に意識をしたのはその店舗の特徴を 3 つの言葉で記録すること。気に入ったパン、パンの種類の傾向、お店の内装、定員さんとの親しみやすさなど好き勝手に書いている。そのメモを見返して感じることは、噂で聞く通り京都にはたくさんのパン屋が集まり、それぞれに特色があるということだ。例えば、全般的にコロッとした小さめのパンを販売して様々な種類のパンを楽しめるお店や、小麦粉を全粒粉や米粉に置き換えて健康志向の食事を提供するお店、毎月期間限定商品を複種類販売しリピーターを狙うお店、フランス人シェフが本場の伝統的なパンを製造するお店などもある。これだけ多様なパン屋がさほど広くない京都盆地に共存しているのはお見事である。毎度違ったパン屋で違った特徴をもつパンを手に入れられるので食生活を満喫できている。また、地図でパン屋を探してはそこに足を運ぶうちに京都の様々な道を辿ることができた。お店によっては住宅街の中にあったり坂の上にあったりするのでパン屋を探していなければ見なかった景色はたくさんあっただろう。

多様なパン屋が集まる京都の環境からパン屋巡りという趣味を貰い、京都のランドスケープも一緒に楽しむことができている。未知のパン屋と未知の京都を探して私はこれからもペダルを踏む。

HdB での生活

野村 洸太（日本）
京都大学経済学部

私は 2023 年 4 月からこの寮に住んでおり、この原稿を書いている時点で既に 8 ヶ月が経過しました。最近は寮の友達とビリヤードやサッカーをしたり、一緒にジムに行ったりととても充実した日々を過ごしています。

寮に入ってからは、楽しいイベントの連続でした。金曜日のコモンミールだけではなく、5 月に大阪に行き、7 月に琵琶湖に行き、他にも BBQ や祇園祭などを HdB の友達と一緒に参加しました。10 月に新しい寮生がたくさん入ってきてからは Halloween Party や IFF/Thanksgiving など国際的な寮だからこそ行えるイベントがたくさんありました。特に IFF はとても印象に残っています。私はアルゼンチンの料理を担当して、Damian, Selma と一緒に Milanesas De Pollo（チキンのサンドウィッチ）を作ったのですが、HdB にやってきた人々に私たちが作った料理を提供するのはとても楽しく、美味しそうに食べている人を見ると嬉しく感じました。私は料理があまり上手ではないのですが、美味しい料理を提供できることの楽しさや達成感を身をもって知ることができました。また、IFF で昔 HdB に住んでいたという方を多く見かけたため、HdB を退寮した後も、IFF のようなイベントに参加してまた帰ってきたいなと感じました。

HdB は自分にとってとても住みやすく良い場所ですが、あえて HdB の難しいところに触れようと思います。まず一つ目は言語の問題です。日本語、英語、中国語、ドイツ語などさまざまな言語が飛び交っているため、例えば日本人同士で日本語で話している時に、日本語がわからない人が会話についていけないなどの問題があります。なので状況に応じて英語など他の言語の利用が大事だなと感じました。二つ目はキッチンの汚さです。使った後の皿がシンクに放置されたままのことがよくあります。自分もしてしまう時があるので、キッチンは共用という意識を持って気をつけなければいけないと感じます。HdB では、ハウスミーティングという寮生が意見などを言い合って寮生活を改善することができる機会が設けられているので、問題があれば積極的に解決できるようにしていきたいと思いました。残りの期間も HdB で楽しい学生生活を送れれば良いと思います。

Lively HdB dormitory

Wongprasertkun Pornpailin (タイ)
Graduate School of Electrical Engineering, Department of Electrical Engineering, Kyoto University

It has been 4 months for living here at HdB. I am from Thailand as research student in Kyoto university. I want to find remarkable experiences outside the university, fortunately I found HdB dormitory ,so I decided to move in and spend time in this cozy dormitory. It is fantastic opportunity to meet foreign friends and have a fun time together.

The place that I like the most in HdB is the garden. There are many kinds of trees. We can enjoying color change and take a breath in this garden. It is the best area ever and rarely to has it in you apartment. Moreover, we can practice our skill for running HdB activity and rules such as teamwork, management and communication skill.
I applied my skill to create posters for promoting HdB activity. I can do what I like and it's useful for our house.I designed the poster for Sport day and Christmas party.

(1) Sport day

(2) Christmas Party

Even if it is a short time staying here. But I received a lot of good energy and friendship. If you want to find new experiences and beautiful memories, Please do not hesitate to join us.

My HdB memories

Jindapa PHINMEE, (Thailand)
Graduate School of Agriculture Kyoto University

Staying at the HdB dormitory in Kyoto has been a transformative experience, filled with a kaleidoscope of emotions. The diverse community of international friends, including warm-hearted Japanese companions, has woven a tapestry of connections that transcends borders. In this vibrant melting pot of cultures, the shared laughter, stories, and moments of understanding have created a sense of belonging that goes beyond geographical origins.

The dormitory's atmosphere is charged with energy, with activities fostering both personal and Staying at the HdB dormitory in Kyoto has been a transformative experience, filled with a kaleidoscope of emotions. The diverse community of international friends, including warm-hearted Japanese companions, has woven a tapestry of connections that transcends borders. In this vibrant melting pot of cultures, the shared laughter, stories, and moments of understanding have created a sense of belonging that goes beyond geographical origins.

The dormitory's atmosphere is charged with energy, with around-the-clock activities fostering both personal and collective growth. From language exchange sessions that bridge linguistic gaps to cultural festivals that celebrate the richness of our differences, each day is a new adventure. The shared spaces buzz with the excitement of friendships being forged and memories being made.

As I reflect on my time at HdB, I realize that it's not just a place to stay; it's a home where the world comes together. The international tapestry of backgrounds and experiences has added depth to my understanding of the world, and the camaraderie formed here is a testament to the universality of human

connection. Kyoto, with its timeless beauty, serves as the backdrop to this enriching chapter of my life, making my stay at HdB an indelible part of my journey.

さよならは悲しいことばじゃない

仇 宏暄（中国）
京都大学人間環境学科

この year book を書くのももう 3 度目。これが最後になると思います。 時間は流砂のようなもので、決して掴むことはできません。あっという間に手の中で滑り落ちて消えてしまいます。

2023 年は、一言で言えばスリリングな年でした。私が日本、京都へ来て 3 年、やっとのことで博士課程の修了が決定しました。私はこの 3 年間、ずっと Hdb に住んでいました。この「ラブアパートメント」は多くの人々の成長を見届けてきました。さまざまな人々が行き来するこの場所では、あらゆる国の人々が交流し、いつも活気に満ちています。 この寮だけでなく世界においても、人々はお互いを理解する前に、何かを通してお互いを知る必要があると思います。しかし、おそらく文化の違いのせいで誰でもその場所に溶け込めるわけではないでしょう。私は誰もが孤島、つまり自分の島にいると思っています。私はこう見えて、島から一歩外へ出るだけでも大きな勇気が必要な人間です。しかし、私と同じように、誰もが温もりを求めているでしょう。ちょっとした笑顔が、痛みを癒し、他の島へ出かけるきっかけになると考えています。人はそれぞれ異なりますが、誰もが平和に調和して暮らすことができる、これが最大のメリットです。

我々の孤島を囲う海である HDB での 3 年間、ハウスペアレンツはじめ水谷内さん、吉竹さんらスタッフのみなさんは、我々レジデントを自分の子どものように思ってくださいました。あらゆる問題を解決することに尽力してくださり、私はまるで、日本に家があるような気分でした。皆様には本当に感謝したいです。また、レジデントの皆様にも感謝の気持ちを伝えたいです。私は、他のレジテントとは若干の年齢差がありましたが、皆さんいつも私の話を聞いてくれて、日々の生活にちょっとした刺激を与えてくれました。

悲しいですが、何事もいつかは終わりを迎えます。さよならは悲しいことばじゃないってよく聞いたの日本語歌詞で信じて、人はまた次のステージに移って生きていかなければなりません。またこれからも、前を向いて進んでいきたいです。

My Ping Pong Revival from HdB

劉笑聡（リュウ・ショウソウ）（中国）
京都大学医学研究科

Originating from a region where ping pong thrived, my introduction to this sport began in my early school years. Unfortunately, a foot injury disrupted my practice, causing a hiatus that lasted for years. Throughout my academic pursuits from secondary school to university, my engagement with ping pong dwindled, becoming an occasional pastime amidst the demands of studies.

Unexpectedly, HdB's lobby, of all places, had a ping-pong table and a bunch of ping-pong fanatics hanging around. As each common meal drew to a close, the rhythmic sound of the tournament echoed through the lobby, drawing players and spectators alike. In these moments, beyond the sheer joy derived from playing and watching, a unique camaraderie blossomed, weaving threads of understanding and connection among us.

Remarkably, this encounter reignited my passion for ping pong, propelling me to join a local ping pong club and embark on structured training. Further, this decision became the catalyst that launched me into the competitive arena of ping pong tournaments.

This tale might well epitomize the essence of HdB's lobby. It serves as a treasure trove, encapsulating diverse passions and enriching our lives in unexpected ways...

My first 3 months in HdB

Damian Ratto（ダミアン　ラット ）（アルゼンチン）
Kyoto University – Graduate School of Management

Since my arrival to HdB I was able to find one of the only things that was lacking for me to feel at home here in Japan: the warmth of a family.

During my first months in Japan, prior to arriving to HdB, there were some questions in the back of my head that would come from time to time and disturb my happiness, like: ¿Who's going to be there for you if something bad were to happen? ¿Who are you going to ask for help while outside the university? ¿Is there someone here who would get happy whenever you achieve something? ¿Is anyone going to come to celebrate your 30th birthday? ¿Are you really making the most out of your days here in Japan?

And then I joined HdB and all those questions started to become pointless as the answers are so clear now that I made so many friends, now that I feel part of a family again, now that I can share my happiness with so many people, and even my birthday was one of the bests of my life…

So now that all those questions have faded away, my only concern is if I really deserve to be this happy, and to feel like I do, I'll keep on giving my best for HdB and its people.

My RAMEN love story

Ando Harilalao RAKOTOMAMONJ (Madagascar)
Graduate School of Agriculture, Kyoto University

Hey there! I'm Ando Harilalao RAKOTOMAMONJY, and I hail from the one and only island paradise, Madagascar! Yes, that's where lemurs have epic dance parties, and even our chameleons have a flair for stand-up comedy. Living the island life with a name that's

practically a tongue twister, but hey, it adds some extra spice to the adventure!

Living at HdB for a year and a half has been a wild ride of research challenges, but what keeps me going? RAMEN! It's my go-to motivation to conquer every academic hurdle. In this dynamic HdB community, I've connected with two fabulous African women and many Japanese students and international peers from around the globe-basically, my second family. Learning about Japanese culture, from Christmas celebrations to tea ceremonies, has been delightful. Japanese culture is my Before Anything Else-infusing joy and laughter, turning life's lemons into a ramen-flavored celebration!

こんにちは！私はアンド・ハリララオ・ラコトマモンジーと言います。マダガスカルという島出身です！ そう、ここはリーマーがエピックなダンスパーティーを開く場所で、カメレオンさえもスタンドアップコメディに興じるんですよ。名前がまさに早口言葉みたいで、でも冒険にエキストラスパイスを加えてくれるんです！

HdB で 1 年半過ごす中で、研究の挑戦が続いていますが、どんなストレスにも対抗できる秘密兵器があるんです！ラーメン！これが私のアカデミックな山を乗り越える究極のモチベーションなんです。このダイナミックな HdB の仲間たちは、素晴らしいアフリカ系女性 2 人だけでなく、たくさんの日本人学生や世界中からの留学生も交えて、まるで第二の家族のようです。クリスマスのお祝いから茶道まで、日本の文化に触れることが喜びです。日本の文化は私にとって、何よりも大切なもの。喜びと笑いをもたらし、人生のレモンをラーメン味の喜びに変えてくれるんです！

Zero Japanese and One-Hundred Percent Commitment

Lindert Selma (Germany)
Ruprecht-Karls-Universität Heidelberg

When asked writing about life in HdB I am still confronted with a blank page, both literally and figuratively speaking. It seems like just yesterday when I had just arrived here in september, spending the nights Jetlagged in my room, dying of the heat, texting my friends in Germany and consuming Netflix to wish myself away, back to a place I had called home. But lots things have happened since then. After three months of living here I still have but a basic knowledge of Japanese and a high ability to improvise and communicate despite lack of language skills. And more and more moments connect me with the place I live in, HdB. To give through a small picture insight into the everyday living here especially in the time around the common meals, I will give a short story about this years Halloween Party.
As I was responsible for cooking that week, I was allowed to prepare a German potato soup for about forty people. However, when I put 10 kilos of potatoes on the shopping list, I was reprimanded by the housemother - nobody can eat that many potatoes! I must have been a bit too German of me... However, a day later I learn that there will be another main course and several snacks, so I don't have to feed a whole army of potatoes and I reduce the quantity. In the Japanese supermarkets I get potatoes, carrots and celery - instead of leeks, the shopping team brings me spring onions, but they will do, and by good luck I even find bay leaves in our kitchen.

One day before the Halloween party, the whole kitchen is immersed in happy commotion. The decorating team sticks cardboard pumpkins and witches' hats on the walls and hangs orange-coloured garlands everywhere - the whole kitchen is filled with the various cooking teams preparing dishes from all over the world for the next day: Japanese yakitori (chicken on a skewer), Chinese fried rice, German potato soup, glass noodle salad and "tsumetai-inu" for dessert, as Lisa calls it.Der Kochtopf, den ich für die Suppe benutze ist etwa so groß, dass ich fünf menschliche Köpfe darin zubereiten könnte und vor den zwölf Kochzwiebeln, die ich schneiden muss, kann ich mich nur schützen, indem ich meine Sonnenbrille trage, die ich übrigens so cool finde, dass ich sie einfach den ganzen Abend nicht mehr abnehme, etwa so wie Olaf Scholz seine süße Augenklappe liebgewann.

Chris is another member of the German group, so we treat our flatmates to German music all evening, alternating between Nena, Apache and Udo Lindenberg. Ed Foxhall, who is also studying here on exchange, speaks a few scraps of German and can sing along perfectly - otherwise he scurries around the kitchen shouting "Mein Schatz", which is German for “My dearest”, whenever he wants to ask me or Chris for a favour.

It was a wonderful evening and the next day the same hustle and bustle starts again two hours before the party. Father turns up and asks me to set up the tables together. For the Halloween party, Dad has thrown on a pair of orange felt wings and pulled two little antennae over his head - and because he looks so incredibly cute in them and even waves his wings around without shame, he gets the prize for the best costume of the evening. I myself simply wear my favourite earrings, sunglasses and tie a white headscarf around my head, which means my costume can perhaps be described as a "person with cool accessories that are no longer considered cool by the zeitgeist". We eat together and the potato soup is expressly praised - every second person asks for the recipe and for the first time I realise what intercultural exchange means, because this potato soup is actually exotic for most of the people here. I explain to everyone that I have literally done nothing other than boil chopped vegetables in water with vegetable stock and then add salt. - The rest of the evening then passes with little Halloween games and a long organisational part where we plan the big Thanksgiving feast that is to take place in November. Around nine o'clock, the others get ready to go out for a real Halloween feast after the innocent Halloween dinner.

日本語学習の穴場

WANG　REN（ワン　レン）（中国）
京都大学大学院経済学研究科

この度皆様に紹介したいのは、京都で日本語学習を行う上で素晴らしい場所の一つです。

HdB から歩いて 15 分ぐらいの距離で、京都市動物園の近くに位置する京都市国際交流会館（通称 KOKOKA）では、二十代の大学生から八十代の高齢者まで優れた先生たちが毎週火曜から金曜まで、ボランティアとして外国人に日本語を教えています。会館の運営を維持するため、一時間半ぐらいの授業は一回につき 200 円かかりますが、個人的には十分お得な値段だと思います

これまでにKOKOKAで30人以上の先生と出会い、皆の日本語教育及び国際交流にかける熱意に深く感銘を受けました。先生の中には大学の教授、公務員、新聞記者など、充実した人生を過ごされている方が多く、彼らは日本語のみならず、多様な知識や経験を学習者たちに伝えています。どの国の出身でも、どれくらいの日本語レベルでも、日本語あるいは日本文化に興味のある外国人であれば、誰でも気軽に授業を受けられます。

今振り返ってみると、一番印象深い先生はやはり今年86歳の谷口さんです。毎日家でくつろいでいてもおかしくない高齢者なのに、毎週の日曜日の午前自転車でKOKOKA に来られ、最近の新聞記事及び京都の年中行事予定を紹介する本を資料に、学習者たちに生き生きとした日本語を教えられています。残念ながら、KOKOKA のボランティアは任期の制限があるので、来年三月いっぱいで引退されるようです。

皆様ももし自分自身の日本語能力を向上させたかったり、日本文化についてさらに知りたかったりすれば、ぜひKOKOKAに行ってみてください。

Keep HdB GREAT

王 然（中国）
京都大学大学院情報学研究科

I have been at HdB for two years. I can confidently say that HdB is a GREAT place.

HdB hosts many exciting events, such as the Common Meal, International Food Festival, and Thanksgiving Day (basically, we are just cooking and cooking again). We are divided into different groups for various tasks. Incredibly, every event went smoothly even when our organization was slack — some members sometimes even forgot their responsibilities. I believe this success is due to some of us putting in extra effort, especially the extraordinary efforts of the house parents, which resulted in unforgettable experiences for everyone. However, my question is how to keep HdB GREAT.

The essential thing is to ensure every resident realizes the importance of following HdB's rules. Furthermore, we need to develop a series of standard operating principles (SOP) to guarantee the success of events rather than relying on miracles created by the hardworking house parents. The key to making HdB GREAT is that we all should contribute a bit more. Last year, residents continually came up with new ideas, such as the marvelous dance class,

various performances, and a home party invitation from the house parents. I am very thankful that the house mother taught me how to play the piano so that I could contribute two Chinese-style pieces last Thanksgiving Day.

To maintain HdB's greatness this year, every resident should consider and do more to provide new residents with an unforgettable experience.

【資料】

公益財団法人京都国際学生の家　役員等

監　事（2023 年度）

浅　田　拓　史　　（大阪経済大学教授、公認会計士）
折　田　泰　宏　　（弁護士）
秋　津　元　輝　　（京都大学教授、OM 会員）

HF	:House Father
HM	:House Mother
HC	:House Committee
OM	:Old Member

評議員会（2023 年度）

深　海　八　郎　　（眺八海倶楽部総支配人）
村　田　翼　夫　　（筑波大学名誉教授、OM 会員）
吉　田　和　男　　（京都大学名誉教授）
平　野　克　己　　（日本塗装機械工業会専務理事）
山　田　祐　仁　　（辻調理師専門学校、学寮運営委員長、OM 会員）

理事会（2023 年度）

理事長

内　海　博　司　　（京都大学名誉教授、元 HF、OM 会員）

常務理事

吉　川　晃　史　　（関西学院大学教授、公認会計士）

理　事

山　本　慶　一　　（HF）
上　村　多恵子　　（京南倉庫㈱代表取締役社長）
嘉　田　良　平　　（総合地球環境学研究所 名誉教授、OM 会員）
吉　村　一　良　　（京都大学名誉教授、元 HF、OM 会員）
RUSTERHOLZ Andreas　（関西学院大学文学部教授）
永　井　千　秋　　（公財）新産業創造研究機構　技術アドバイザー、OM 会員）

顧　　問（2023 年度）

所　　久　雄　　（社会福祉法人京都国際社会福祉協力会理事長）
平　松　幸　三　　（京都大学名誉教授、OM 会員）
森　棟　公　夫　　（椙山女学園特別顧問、京都大学名誉教授）
柴　田　光　蔵　　（京都大学名誉教授）

岩　﨑　隆　二　　（和晃技研㈱代表取締役社長、OM 会員）
中　島　理一郎　　（元同志社大学教授、OM 会員）
西　尾　英之助　　（京都日独協会会長）
蔦　田　正　人　　（弁理士法人蔦田特許事務所代表、ＯＭ会員）
諏　訪　共　香　　（元立命館大学講師）

学寮運営委員会（HC）（2023 年度）

運営委員長

山　田　祐　仁　　（辻調理師専門学校、OM 会員）

運営委員

坂　口　貴　司　　（三菱電機㈱、OM 会員）
鈴　木　あるの　　（京都橘大学教授）
TANANGONAN Jean　　（近畿大学講師、OM 会員）
DAVIS Peter　　（Telecognix Corporation CEO）
松　橋　眞　生　　（京都大学准教授、元 HF）
長谷川　真　人　　（京都大学教授）
北　島　　薫　　（京都大学教授、元 HM）
笹　山　忠　則　　（大阪府立大学名誉教授、元福岡県行橋市教育長）
Naresh Bedi　　（元 HF、OM 会員）
Joseph A. Phillips　　（元 HF）
長谷川　晶　　（学校法人京都情報学園理事、京都情報大学院大学教授）
山　本　慶　一　　（House Father）
山　本　夏　子　　（House Mother）
CHAIRPERSON of TEAM
VICE CHAIRPERSON of TEAM

職　　員（2023 年度）

水谷内　典　子
吉　竹　慶　一
樋　口　洋　子

2023年度　補助金・寄付金・その他ご支援

2023年1月1日～2023年12月31日受領分　　敬称略

補助金・助成金

『公益財団法人　中島記念国際交流財団助成』 (独)日本学生支援機構2023年度留学生地域交流事業	222,000円（予定）
『一般財団法人　MRAハウス　「日本とアジアの未来」助成金』	200,000円

寄付金　計　1,709,000円

寄　付　者	寄　付　者	寄　付　者	寄　付　者
㈱三悦　代表取締役 樋田浩三	㈱トータルサポート サービス	サン子ども園福泉園 吉川昭一	ボーイスカウト京都 第42団　谷口　平八朗
有限会社ハイナン 土屋俊宏			

HEINRICH REINFRIED	Jack Crawford	JON TANAKA	TSAI YOU SHAN
Van Der Struijk Stef	Vincent　Brilling	YIJUN CHEN	秋津　元輝
浅井　裕理	浅田　拓史	石原　ゆき子	井田　典子
井上　富子	岩田　忠久	岩沼　享子	上田　学
内海　博司	大菅　克知	大槻　憲弘	大西　優
大畑　京子	岡本　修身	岡本　徳子	置田　和永
荻原　悦子	小野　公二	鎌野　幸子	木原　文太左右衛門
金　盛彦	窪田　弘	黒田　旬	児玉　靖司
後藤　隆騎	琴浦　良彦	小西　淳二	木葉　丈司
近藤　敬司	坂野　泰治	佐々木　正夫	下荒地　勝治
申　旻耿	鈴木　武夫	鈴木　松郎	竹田　洋子
多田　譲治	田中　徳壽	谷　幸治	田森　行男
千葉　絢子	張　博訳文	塚田　實	辻村　富子
辻本　圭助	手塚　修司	寺本　美智子	土居　貞徃
十河　智江子	冨永　芳徳	内藤　義弘	永井　千秋
仲谷　正博	成田　康昭	西本　太観	野田　和伸
早内　髙士	深海　八郎	福川　明裕	福本　和久

藤原　邦夫	古川　彰、千佳	古田　和子	前上　英二
眞木　恵子	松田　敬一	美濃　導彦	村田　翼夫
森棟　公夫	矢島　脩三	薮下　義文	薮田　定男
山田　祐仁	山本　慶一、夏子	山本　雅英	山本　峰丸
湯夢　佳	吉村　俊之	ヨハン・シャラー	和田　浩一
渡邊　恵子	氏名なし　1名		

寄贈品・その他　　アルコール類、食品類のご寄附をいただきました。

置田　和永	柿（2箱）	株式会社　三悦	商品券
後藤　淳子	グランドピアノカバー	国際ソロプチミスト 京都たちばな	ビール
笹山　忠則	麻雀卓、ワイン、砂糖	松竹株式会社　南座	歌舞伎招待
髙田　徳子	楓（日本庭園の植樹）	有限会社　ハイナン 土屋俊宏	商品券

皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

＊2024年1月以降のご寄付分は、次年度の報告書に記載させていただきます。

公益財団法人京都国際学生の家の略史

西暦 和暦	ハウスペアレンツ 日本	 スイス	事項
1961 S36			・1月21日--スイス東アジアミッション(SOAM)コーラー牧師構想の 「出会いの家」を京都に実現するための募金活動開始(於チューリッヒ) ・11月19日--第1回京都「国際学生の家」建設発起人会
1962 S37			・3月24日--第1回京都「国際学生の家」建設実行委員会
1963 S38			・6月--SOAMとHEKSより67万スイスフラン(邦貨約5,560万円)の寄付 ・12月16日--財団法人京都「国際学生の家」設立 ・12月16日--理事長湯浅八郎博士就任 ・12月16日--財団法人京都「国際学生の家」寄付行為制定
1964 S39			・8月10日--学寮建設工事契約;㈱竹中工務店、総額約8,700万円 ・8月中旬--地鎮祭 ・10月14日--寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認 (4教文第388号・京都府教育委員会委員長) ・12月25日--財団法人京都「国際学生の家」規約制定
1965 S40	4月: 稲垣 Inagaki	4月: ﾄﾞﾏﾑｰﾄ Dumermuth 9月: ｺｰﾗｰ Ckohler	・3月31日--竣工 ・4月1日--開寮 ・4月10日--献堂式 ・10月頃--ハウス・チーム誕生
1966 S41			・4月10日--学寮開寮一周年記念式典 ・12月20日--寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認 (雑文第1の28号・文部大臣)
1967 S42	3月: 中山 Nakayama		
1968 S43			
1969 S44	4月: 内田 Uchida	5月: ﾍﾟﾆﾝｶﾞｰ Pfenninger	・12月16日--西館完成
1970 S45	7月: 不在		
1971 S46	4月: 大沢 Ohsawa	4月:ﾍﾞｱ Bär	・2月18日--年報第1号発行
1972 S47		3月:ｹｯﾀｰ Kötter	
1973 S48	6月: 内海		・財団法人万博協会より資金を受け、屋上改修工事

	Utsumi		
1974 S49	50	4月: 内田 Uchida 12月:ﾊﾟｯﾄﾅﾑ Putnum	・4月1日--財団法人京都「国際学生の家」諸規則の改正 ・5月18日--十周年記念式典 ・5月1日--年報『出会い』第2号「十周年記念号」発行
1975 S50	7月: 山本 M. Yamamoto		
1976 S51			
1977 S52			・6月24日--「ライオンズ基金要綱」を制定 寄付金総額1,340万円を基本財産に組み入れ 昭和50年度・51年度のライオンズクラブ(京都27クラブ)よりの寄付
1978 S53			
1979 S54			
1980 S55	3月: 琴浦 Kotoura		
1981 S56			・8月15日--初代理事長・湯浅八郎博士逝去
1982 S57		2月: ﾌﾞﾙｺﾙﾀｰ Burkolter	
1983 S58	9月: 古川 Furukawa		・1月31日--第2代理事長に上野直蔵博士就任
1984 S59			・8月21日--創始者・ウェールナー・コーラー博士逝去 ・10月2日--第2代理事長・上野直蔵博士逝去 ・10月26日--第3代理事長に遠藤彰氏就任
1985 S60			・3月8日--年報第8-9号「二十周年記念号」発行 この年にHdBのエンブレムの制定 ・10月1日--国際交流基金の第1回国際交流奨励賞地域交流振興賞受賞 ・10月19日--創立二十周年記念式典
1986 S61			
1987 S62	4月: 内海	3月: 不在	

	Utsumi		
1988 S63			・1月18日--財団法人京都「国際学生の家」諸規則の整備
		4月：ﾌｫﾚﾝﾊﾞｲﾀﾞｰ Vollenweider	・5月28日--財団法人京都「国際学生の家」パンフレット作成 ・10月15日ー京都市より表彰
1989 S64 H1			・7月2日--第1回国際食べ物祭り開催 この年にHdBの旗を制定
1990 H2	8月：山本 Yamamoto	4月:ｵｯﾃ Otte	・3月31日--第3代理事長・遠藤彰氏辞任(広島女学院大学学長就任) ・4月1日--第4代理事長に稲垣博博士就任
1991 H3			
1992 H4			
1993 H5	4月：吉村 Yoshimura		
1994 H6		3月：ｳﾞｨﾀﾞｰ Wider	
1995 H7			・7月8日--創立三十周年記念式典（SOAM会長他5名来日、出席）
1996 H8	4月：戸口田 Toguchida		
1997 H9			
1998 H10			
1999 H11	4月：高橋 Takahashi		12月31日--SOAMとの法的関係解消、ハウスファーザー二人制廃止
2000 H12		1月：以降、廃止	・9月6日--財団寄付行為の改正
2001 H13			・3月下旬--全職員の退職・全寮生の退寮 ・4月初旬--大改修工事開始

			・8月末日--工事完工 ・9月1日--再開館、新職員採用 ・10月21日--再興祝賀行事開催
2002 H14	8月：木戸 Kido		
2003 H15			
2004 H16			
2005 H17			
2006 H18	4月：前川 Maekawa	ハウスアドバイザー 10月：ブアデン Buadaeng	
2007 H19		3月：帰任	・1月20日--第4代理事長・稲垣博博士逝去 ・5月20日--第5代理事長に内海博司就任 ・11月17日--稲垣先生を偲ぶ会
2008 H20			・7月10日--第2代ハウスマザー・ネリー・コーラーさん逝去 （創始者・ウェルナー・コーラー夫人）
2009 H21	8月：松橋 Matsuhashi		・7月17日--第3代ハウスマザー・ペニンガー好美さん逝去
2010 H22			・2月12日--石井米雄理事逝去 ・6月30日--田村武理事逝去 ・9月3日--西島安則評議員逝去 ・11月6日--創立四十五周年記念式典
2011 H23			
2012 H24	4月：山本 Yamamoto		・3月31日--公益財団法人移行申請
2013 H25			・4月1日--公益財団法人認可 ・10月31日--第1次耐震審査実施（本館）
2014 H26	6月：北島 Kitajima Phillips		
2015			・3月30日--寄付金税額控除認可

H27			・11月7日--創立五十周年記念式典
2016 H28	3月: 飯田 Iida Hidding		・5月31日--第2次耐震審査実施(本館)
2017 H29			・3月--本館耐震・リフォーム案、西館立替案作成 ・9月27日--募金委員会発足 ・10月1日--募金趣意書作成、募金活動を開始
2018 H30			・8月～12月A-portにてクラウドファウンディング
2019 H31 R1	3月: 崔 Choi		・2月26日--新募金趣意書作成(第一期工事に絞った)し、募金活動を続ける ・6月8日--第1回同窓会(OM会)公開講演会、総会の開催
2020 R2	4月:村上 Naresh Murakami		・4月からコロナウイルスのパンデミックが始まる ・4月～6月--耐震工事及び排水管交換工事、運動場を第2駐車場に変更 ・7月29日--初代ハウスマザー稲垣和子さん逝去 ・12月12日--第2回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催 ・10～12月--ReadyForにてクラウドファウンディング
2021 R3	4月:ナレス Naresh		・1月--神田啓治顧問逝去 ・2月3日--シュペネマン・クラウス顧問逝去 ・7月17日--第3回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催 ・11月～2022年1月--ReadyForにてクラウドファウンディング
2022 R4	4月:山本 Yamamoto		・3月になるもコロナウイルスのパンデミックが続き留学生は入国できず。 ・6月25日--第4回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催 ・11月1日--大畑浩志元監事逝去 ・11月--ガス給湯器改修工事(本館・西館)
2023 R5			・3月--消火水槽改修工事 ・6月--地下トイレ廃止・1階に共有トイレ新設 ・6月17日--第5回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催

公益財団法人京都国際学生の家　利用者の集計

● 学生の部（レジデント）

国籍別利用者実数

1965 年 4 月から 2023 年 12 月までの合計　　83 ケ国　　1100 名

アフガニスタン	6 名	コロンビア	1 名
アメリカ	48 名	コンゴ	1 名
アルゼンチン	4 名	コートジポアール	1 名
イギリス	14 名	ザイール	1 名
イスラエル	1 名	シンガポール	19 名
イタリア	6 名	ジンバブエ	1 名
イラク	3 名	スイス	12 名
イラン	13 名	スウェーデン	3 名
インド	22 名	スーダン	1 名
インドネシア	26 名	スペイン	1 名
ウガンダ	1 名	スリランカ	11 名
ウズベキスタン	2 名	セネガル	1 名
エジプト	8 名	タイ	44 名
エストニア	2 名	台湾	27 名
エチオピア	2 名	タンザニア	4 名
オーストラリア	2 名	チェコスロバキア	4 名
オーストリア	1 名	中国	71 名
オランダ	12 名	朝鮮	4 名
カザフスタン	1 名	チリ	3 名
ガーナ	1 名	ドイツ	56 名
カナダ	4 名	ドミニカ	2 名
韓国	52 名	トルコ	12 名
カンボジア	13 名	ナイジェリア	3 名
キプロス	1 名	日本	359 名
キルギス	1 名	ニュージーランド	7 名
グルジア	1 名	ネパール	6 名
ケニア	6 名	ノルウェー	4 名
パキスタン	6 名	ホンジェラス	1 名
ハンガリー	6 名	マリ	1 名
バングラディシュ	5 名	マレーシア	23 名
フィリピン	16 名	マダガスカル	3 名

フィンランド	1 名	南アフリカ	1 名
ブラジル	9 名	ミャンマー	16 名
フランス	9 名	メキシコ	2 名
ブータン	1 名	モロッコ	4 名
ベトナム	36 名	モンゴル	10 名
ベネズエラ	2 名	ユーゴスラビア	4 名
ペルー	4 名	ラオス	1 名
ポーランド	5 名	リトアニア	1 名
ボリビア	1 名	ルーマニア	1 名
ポルトガル	3 名	レバノン	1 名
香港	15 名		

● 学者・研究者の部（スカラー）

国籍別利用者実数（同一人物の利用・同行家族を含まない）

1965 年 4 月から 2023 年 12 月までの合計　96 ケ国　3109 名（内国籍記載なし 17 名）

アイルランド	1 名	ウズベキスタン	1 名
アフガニスタン	1 名	ウルグアイ	1 名
アメリカ	336 名	エストニア	1 名
アルジェリア	4 名	エジプト	26 名
アルゼンチン	1 名	エチオピア	1 名
アルメニア	1 名	オーストラリア	39 名
イギリス	111 名	オーストリア	19 名
イスラエル	11 名	オランダ	35 名
イタリア	45 名	ガーナ	3 名
イラク	3 名	カザフスタン	1 名
イラン	20 名	カナダ	47 名
インド	107 名	カメルーン	1 名
インドネシア	115 名	韓国	206 名
ウガンダ	1 名	カンボジア	4 名
ウクライナ	9 名	旧ソビエト連邦	14 名
キルギス	1 名	ネパール	11 名
ギリシャ	4 名	ノルウェー	7 名
ケニア	3 名	パキスタン	14 名
コスタリカ	2 名	バーレーン	1 名
コロンビア	1 名	ハンガリー	10 名
コンゴ	1 名	バングラディシュ	16 名
ザイール	1 名	フィリピン	38 名

サウジアラビア	1 名	フィンランド	10 名
ザンビア	1 名	ブラジル	27 名
シリア	1 名	フランス	111 名
シンガポール	25 名	ブルガリア	4 名
スイス	187 名	ベトナム	35 名
スウェーデン	16 名	ペルー	6 名
スーダン	3 名	ベルギー	7 名
スペイン	11 名	ポーランド	33 名
スリランカ	11 名	ボリビア	1 名
スロヴェニア	1 名	ポルトガル	8 名
セルビア	1 名	香港	45 名
タイ	188 名	ホンジェラス	1 名
台湾	97 名	マダガスカル	1 名
タンザニア	8 名	マレーシア	40 名
チェコスロバキア	12 名	南アフリカ	2 名
中国	177 名	ミャンマー	10 名
チュニジア	2 名	メキシコ	8 名
朝鮮（在日）	3 名	モロッコ	6 名
チリ	7 名	モンゴル	1 名
デンマーク	5 名	ユーゴスラビア	13 名
ドイツ	302 名	ラオス	2 名
ドミニカ	2 名	ラトビア	3 名
トルコ	22 名	リトアニア	1 名
ナイジェリア	4 名	ルーマニア	3 名
日本	331 名	ルクセンブルグ	3 名
ニュージーランド	10 名	ロシア	24 名

公益財団法人京都国際学生の家後援会会則

（目的）

第１条　この規程は、公益財団法人京都国際学生の家（以下財団という。）の後援会員の入会及び退会並びに会費の納入に関し、必要な事項を定めるものとする。

（会員）

第２条　財団の事業に賛同し、財団を支援する意を有するものは、後援会員となることができる。

２　会員になろうとする者は、所定の申込書を、代表理事あてに提出するものとする。

（会費）

第３条　会員は理事会で定められた会費を、入会時に納入するものとする。

２　年会費は会員種別に応じて下記各号のとおりとする。

（１）　個人会員（OM 会員）　年額　一口　5,000 円

（２）　法人・団体会員　年額　一口　30,000 円

*OM= Old Member、元寮生

（退会）

第４条　会員は、いつでも退会届を財団に提出することにより、退会することができる。

２　前項の場合、当該年度の会費が未納のときは、これを納入しなければならない。

３　既納の会費は、いかなる理由があってもこれを返還しない。

（改正）

第５条　この規程の改正は、理事会の議決を経て行うものとする。

附則

１　この会則の施行に関し、必要な事項は別に定める。

２　この会則は、公益財団法人の設立登記の日（平成 25 年 4 月 1 日）から施行する。

３　この改正会則は、平成 26 年 3 月 10 日より施行する。（平成 26 年 3 月 8 日第 3 回理事会にて改訂）

公益財団法人京都国際学生の家同窓会会則

（名称）　第 1 条　本会は京都国際学生の家同窓会（略称 OM 会:Old Member 会）と称する。

（所在地）第 2 条　本会の所在地は、京都市左京区聖護院東町 10 番地とする。

（目的）第 3 条　本会は、京都国際学生の家の創立趣旨を尊重し、その発展と維持を期し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

（事業）第 4 条　本会は、次の事業を行う。

1 ）学寮の運営と発展とを支援する事業

2 ）その他、本会の目的に沿う事業

（会員）第 5 条　本会の会員は、次の者とする。

1 ）学寮の学生として在籍経験者、

2 ）学寮のハウスペアレント経験者、

3 ）学寮のスカラーとして滞在したことのある者で、学寮を支援する意志を有する者、

4 ）学寮の役員、職員を務めた経験者で、学寮を支援する意志を有する者、

5 ）ハウスペアレントの家族であった者で、学寮を支援する意思を有する者。

（総会）第 6 条　総会は会員で構成し、開催の 30 日前までに通知して会長がこれを招集する。

2　総会の成立は、日本国内在住構成員の 20 分の 1 の出席による。

3　前項の出席は、代理すべき構成員を明記した委任状の提出によって替えることもできる。

4　定期総会は、毎会計年度の終了後 3 カ月以内に開催するものとする。

5　臨時総会は、会長が開催を必要と認める時、これを招集する。

6　総会は次の事項を審議し、議決する。

1 ）会長、副会長、監事の選任にかかる事項。

2 ）会則の制定および改正にかかる事項。

3 ）予算および決算の承認にかかる事項。

4 ）活動計画および活動報告にかかる事項。

5 ）会員の退会ならびに除名の承認にかかる事項。

6 ）本会の解散にかかる事項。

7 ）その他、会長が必要と認めた事項。

（総会の議決）第 7 条　総会の議決は出席者の過半数の賛成による。

（役員）第 8 条　本会に以下の役員を置く。役員に関するその他の事項は細則に定める。

1 ）　会長　1 名
2 ）　副会長　3 名以内
3 ）　幹事　若干名
4 ）　庶務幹事　若干名
5 ）　会計担当幹事　1 名
6 ）　コーディネーター　20 名以内
7 ）　監事 2 名

2　本条第 1 項 3 ）ないし 6 ）の幹事およびコーディネーターは会長がこれを任命する。

（役員の職務）第 9 条　役員の職務は以下のとおりとする。

1 ）会長は、この会を代表し会務を総理する。
2 ）副会長は､会長を補佐し､会長に事故あるときはその職務を代理する。
3 ）幹事は、事業を円滑に推進するための必要な業務を分担し実施する。
4 ）庶務幹事は、会員に関する名簿の管理その他本会の庶務に係る業務を担当する。
5 ）会計担当幹事は、会計を執行管理する。
6 ）コーディネーターは、会員相互の連絡を密にする業務を担当する。
7 ）監事は運営ならびに会計の監査を行う。

（役員会）第 10 条　役員会は、会長が必要と認める時、これを招集する。

2　役員会の議決は出席者の過半数の賛成による。
3　前項の出席は代理すべき役員を明記した委任状の提出によって替えることもできる。
4　役員会は、電磁的通信手段によって開催することも可とする。

（会費）第 11 条　本会の会員は細則に定める年会費を支払うものとする。会費は本会の維持運営にあて、臨時、特別の活動にかかる費用は別途参加費をもってこれにあてるものとする。

（会計年度）第 12 条　本会の会計年度は毎年 4 月 1 日より翌年 3 月 31 日とする。

（退会・除名）第 13 条　第 5 条に定める会員のうち 3 ないし 5 に該当する会員は、

その意思を表明することにより、役員会の承認を得て、退会することができる。

2　本会の名誉を傷つける等､本会の会員としてふさわしくないと認められる者は、役員会が発議し、総会の議決を経て、除名することができる。

（解散）第 14 条　本会は、総会の議を経て解散する。解散時に本会が所有する財産は、学寮に寄付するものとする。

（会則改正）第 15 条　本会則の改正は、役員会の発議により、総会でそれを承認する。

（細則）

第 1 条　本会の役員を以下に定める。

会長：吉村一良

副会長：ジン・タナンゴナン

庶務幹事：前川佳世子

会計担当幹事：木葉丈司

幹事：柳そらや

コーディネーター：内海博司、平松幸三、梶茂樹、坂口貴司、秋津元輝、鵜塚健、前川佳世子、塩沢祥子、村松拓、ケヴヘイッシュウィリ・ルースダン、河瀬光

監事：平松幸三、嘉田良平

第 2 条　会長・副会長・監事の任期は 4 年間を上限として定める。

幹事の任期は会長が定める。

第 3 条　年会費は￥0 とする。

（付則）

本会則は、2019 年 10 月 18 日より施行する。

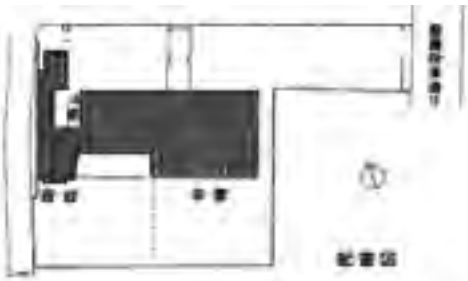
施設概要

所在地　京都府京都市左京区聖護院東町 10
敷地面積　1,900.28 ㎡
建築面積　531.21 ㎡
延面積　1,778.78 ㎡

構造　本館　鉄筋コンクリート造　地下 1 階　地上 4 階
　　西館　鉄筋コンクリート造　地上 2 階

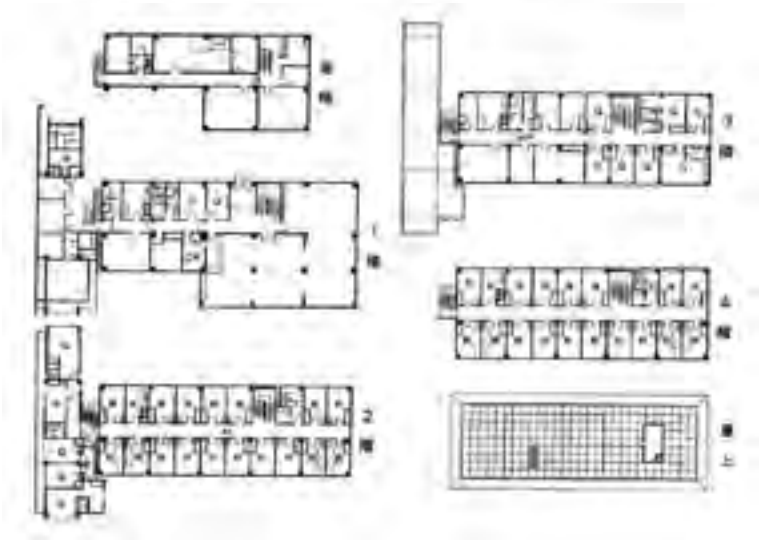
各階用途　本館 1 階　事務室、会議室、ラウンジ、遊戯室、行事用キッチン、トイレ
　　本館 2・4 階　レジデント室 34 室、キッチン 2 室、シャワールーム 4 室
　　本館 3 階　ハウスペアレンツ室、スカラー室 6 室
　　本館地下　洗濯室、倉庫、機械室
　　西館　スカラー室 5 室、ボーイスカウト会議室

学生居室　面積 13 ㎡
洗面設備、ベッド、クローゼット、本棚、机、椅子、エアコン



その他設備
日本庭園、卓球台、ビリヤード、ピアノ

R:レジデント室
G:スカラー室



【編集後記】

公立高校女性校長のキャリアパス

笹山　幸子
（編集委員、大阪府立高校 退職校長会 会員）

私は 2022 年から「京都国際学生の家」（HdB）の『Yearbook』編集委員に加わわりました。大阪大学を卒業後、大阪府立高校の国語科教員として 25 年間勤務し、その後、大阪府教育委員会（主任社会教育主事、首席指導主事）、教頭を経て、3 つの高校で校長を務めました。定年退職後、京都大学大学院で教育行政学の修士号を得ました。

その後、私立大学の教職課程の講師を引き受けました。私の教員としての教育指導経験と校長としての学校経営に関する経験、及び大学院での研究を役立てて、次世代の教職者の育成に尽力しています。生徒を教え育てるという教職の使命・責任・厳しさとともに、生徒の成長に関われる喜び・やりがいを直に伝えています。

編集委員を引き受けて以降、HdB のイベントに参加する機会を得ました。 2024 年 1 月には、学寮生と会食の後、“無意識のバイアス”を主題に、京都大学農学研究科の北島薫教授によるセミナーがありました。

第一線で活躍されている先生の講演を聴き、質疑応答し、学寮仲間と意見交換し、各国の様々な文化・生活背景を踏まえて話し合う... etc.　HdB は、なんと恵まれた環境でしょう。今回のテーマについて、寮生達は今どのようなことを話し合っているか、考えているか、とても関心があります。

私は、主題の“無意識のバイアス”に大変共鳴しました。というのも、私自身のキャリア経験と重なっていたからです。

「生徒の真近くで授業や生徒指導を頑張りたい」「管理職に就く必要などない」
ーーこれは、大阪府立茨木高校で、2000 年 3 月に卒業生を送り出したばかりの 3 年学年主任の教諭笹山幸子が思っていたことです。当時の校長先生から、「茨木高校のためによく頑張ってくれた。これからはその力を大阪府立高校全体のために発揮して欲しい。」と言われ、管理職試験を受けるよう強く勧められました。思いもかけない、そして、有り難い言葉でした。ただ私自身は、「生徒とともに、『教学相長ず』の醍醐味を味わい続けたい。自分は管理職には向いていない。」と思っていたので、推薦を辞退しようと思いました。「管理職は、男性の仕事、女性には無理」と決めつけていました。正に“無意識のバイアス”が働きました。

そして、当時、大阪府立看護大学医療技術短期大学部長だった夫を引き合いに出すことにして、「『夫に相談しましたが、理解が得られなかったのでお断りします』というシナリオ」を自作していたのです。ところが、豈図らんや！夫からの返事は「やってみたら。僕も応援するから。」反対するどころか、行動経済学で言うところの nudge です。文字通り、この言葉に背中を押され、管理職試験を受けることにしました。

生徒のためにできることは、一教員の立場ならその対象は 40 人、多くても１学年 400 人前後。しかし、校長になったら、1000 人以上もの生徒のため、100 人もの教職員のために、私の力を発揮できると思い至りました。

その結果、３つの高校で校長を務めることになりました。PTA・同窓会・後援会の方々とご縁を結び、その協力を得て、生徒・教職員とともに、教育活動を進めました。教諭時代には見えない景色を見ることができました。「校長になってよかった」と思っています。

私が校長になった当時（2008 年）、大阪府立高校の女性校長は 7.4%、また、創立 100 年の進学校茨木高校では、私が初めての女性の学年主任でした。その後、女性学年主任が続いて生まれました。誰かが、一歩を踏み出すことで、道ができ、後に続いて力を発揮しやすくなるのです。また、在籍している生徒達への影響も大きいと考えます。生徒達の将来の進路設計に与える影響を考えると、校内のリーダーの立場の幹部教員がいずれかの性に偏らないことも大切です。

では、女性管理職を増やすにはどうしたらよいか？と考えて、校長を定年退職した後に、京都大学大学院教育学研究科に進学する道を選びました。「公立学校における若手女性管理職候補者の発掘及び育成策」について研究しました。女性管理職のキャリアパスから、いくつかの発掘育成策を考察しました。研究の一部として次のような結論を得ています。◎女性教員に顕著に見られる行動や心理（ライフイベントに関する考え方や、管理職推薦を辞退する心理など）の意識改革◎過剰な配慮や思いこみを捨てて、女性教員に、意識的に経験を提供する上司の働きかけ◎女性教員の「育成目標」を明確に示し、それをもとに継続した育成ーーこれらこそ、“無意識のバイアス”の克服です。

校長就任当初は、管理職になると生徒と離れてしまうのでは？と寂しく思いましたが、校長挨拶や校長講話で、私の教育への思いは十分届きました。生徒達から「私もやりたいことに挑戦したい」「自分が後悔しないような生き方をすることの大切さを教えてもらった」「校長先生の話を聞いて感動しました」等々、私の方が励まされる手紙をもらったことを申し添えます。

「京都国際学生の家」（HdB）学寮生の皆さんには是非、“無意識のバイアス”を超えて多様化を進め、HdB の設立趣旨 Life Together を具現化して欲しいと思います。

編集後記 - HdB でも苦しむわたし -

福田彩乃（日本）
京都府立医科大学　看護学科

戦争は、どうやら無くならないらしい。6 月 OM（Old Members of our dormitory）を迎えたセミナーで、私は「病気と災害はなくなりません。でも、戦争ならばなくせるはずです。」という考えを披露した。あれから半年も経っていないけれど、私の胸には影が何度もさした。絶望をまた何度も感じなければならなかった。

戦争・紛争のニュースやその現実を生きている人々の話をさせてほしい、皆さんも関心を寄せて調べておられるかもしれない。‘かの国’といってどこを思い浮かべるだろうか、私は今年になりパレスチナの時事を一時期必死で追い過ぎてその地域のことを他人事と思えなくなった。ホロコーストの 600 万人の苦しみが吐き出されているのだろうか、刃が突き立てられている住環境がある。住環境としては、日本は現状穏やかで平和であるということが言えると思う。そういう意味でわたしは自分の置かれた立場の特権性と、なにが起こるか分からず自分も再び地獄をみるかもしれないという現実への、自覚がある。それともただ悲観的なだけだろうか？

どこであれ看護師の仕事を懸命にすることで、人を癒したり、回復させたり、できるのは確かだ。けれども、戦争をなくすことができれば、どれほどの人を未然に救うことができるだろうか。人々が生活を回すために必死に働いている一方でいつも着実に生活を壊す準備（軍備など）が進められているのはなんて馬鹿らしいことだろう、と私は考える。すなわち私はいまでも反戦思想を抱いている。

つぎに私が日本のなかで他人事と思えない地域の話をしたい。福島県沿岸部の相双地方である。福島はふるさとを追われた人の苦しみの場所でもある。12 年前の春に大きな地震があり津波もあり被災地となった東北地方において、その直接の被害だけでなく、原子力発電所の事故による避難に次ぐ避難で将来への見通しを持てず、心理的な打撃を受け過ぎた人々がいる。

つぎに‘私’の話をする、私は家庭を追われた、なぜか家庭が壊れてしまったから。いまもどう説明してよいか分からないが、身近な人間関係が寛容と妥協を失っていびつになっていくなかで傷つきおそらく私も人を傷つけた。家族というのは、修復も可能であるとは思うがどうなるだろうか。心理的な打撃を受けたものの、家族でなくても支えてくれる人がいる、幸運を知ることになった。生きていけるというのは当たり

前ではない。『地獄とは人々が苦しんでいるところのことではない。人が苦しんでいるのを，誰も見ようとしないところのことだ。』これはこの秋にパレスチナ・ガザ地区の苦しみに目を向けるよう訴える文面で出会ったマンスール・アル＝ハッラージュという宗教家の言葉である。この言葉を借りてしまおう。地獄が先進国に、日本にはないのだ、なんて決して言えない。

生活人としての存在は、おそらくホモ・サピエンスである以上、普遍である。
わたしは先進国であれ発展途上国であれ生活がいとなみが続くこと自体を礼賛したいと思う。そんな気持ちで看護を続けたいと思う。そのように病からの回復を願ういち人間の視点に立てるのが看護なのである。

けれども私が呑気でいられるのは先進国であること、市場が比較的安定していることや、軍備のちからによって例えば米国の核の傘が（捉えにくいけれど実際にあると思われる）あること等に、頼っているからだろう。平和は軍拡をしてこそ主体的により現実的に得られると考え行動する場合もあるのだろう。話は変わるが世界にはインターネットが行き届いていない地域（世界全体で約 38%の世帯）があり、たとえインターネットが行き届いても例えば HdB まで自由に来られない状態の人がいる。世界は広い。HdB に国内外から集まる residents の存在のおかげでその世界に私にとって身近に思える場所が増えてきた（英語が今よりもできれば、まず英語圏についてもっと情報を得られ、英語圏ならではの言語の思考法を知ることができて更に身近になるだろう）。

医療を通してどんな世界がみえるだろう、待っているだろうか。

まずは看護の実習を乗り越えよう、現場に出よう。

他者との出会いを通して、英語を看護を習得する過程を通して今見たり感じたりしていることを、たとえすべて言語化できなくてもどうか胸に抱えさせていてほしい。かの国に平和が戻ることを祈る気持ちと、わたしのそばで平和が続くことを祈る気持ちは、異ならない、同じである。

結びに。

私のこのような生活の日々に、HdB でのあれやこれやが、関わっているのは言うまでもありません。学業に、学業に、そしてアルバイトやあそぶということに、日々忙しくしている resident 同士なのであります。皆さまから時間の、気力のゆるす範囲で各々の創作を寄せてもらえたことに、深く感謝いたします。

また、OMの先輩方を交えた編集委員会では Yearbook について振り返っているうちに、この寮の来し方にまで話題がおよび、私にとっては貴重なお話を伺えて楽しい場でした。皆さま、ありがとうございました。編集をこれから頑張ります！

一難去ってまた一難：能登半島地震に対応しているOM

内海博司
（HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965OM、元 HF）

2024年元日に発生した能登半島のM7.6の大地震、翌2日の羽田空港での航空機衝突事故で被災された人々に哀悼の意を表します。姉が被災された編集委員もいらっしゃいます。過去にも大きな事故が立て続けに起きたことを思い出しました。1963年11月9日の三井三池炭坑爆発事故（458人死亡）、同日に横浜市鶴見駅近くでの列車の脱線衝突事故（161人死亡）です。まさに「一難去ってまた一難」という諺どおりです。

例年、編集後記を書く頃に、ロシアのウクライナ侵攻（2年前）、イスラエルのパレスチナ侵攻（昨年）と悲しい事件が続いていて、その戦争がまだ終わっていないことは、本当に悲しい限りです。

そのような中で、2月になりHdBのOMから寒中見舞いを受け取りました。1ヶ月ほど家を空けて、能登半島地震への対応のため、電力の復旧、避難所における仮設トイレやベッド、燃料等物質の供給、現地への職員派遣、復旧復興支援等、省を挙げて頑張って、一時帰宅したという経済産業省に勤める辻本圭助氏（大臣官房 技術総括・保安審議官）からでした。彼にメールを送ると、下記のように若手職員への配慮（Work and Life Balace, WLBの問題）する立場で活躍していることが分かり、本当に素晴らしいことだと思いました。

> 他律的な事象も多々激動している中、まずは能登半島地震で被災された住民への支援等国家としてやるべき事を仕上げる、加えて、何はともあれ、雇用と財を生み出す経済を活性化していく、ということにしっかりと取り組んでいこうと思います。今回の能登地震対応でも、現地に若手職員を派遣し、1週間風呂無し、会議室の床で仮眠という過酷な業務を強いましたが、皆、復旧のために寝食を忘れて取り組んでもらいました。現地の住民、首長からは、多少なりとも感謝されていることは、職員個人にとっては励みとなっています。ただ残念ながら、震災対応以外でも、あまりに取り組むべき業務が多すぎ、若手職員にとっては（WLB上）魅力がない職場になっていること、またマスコミ・外部から殆ど評価されることがないことが、課題であり難題です。

彼にOM便りを書いて欲しいとお願いしたのですが忙しすぎて無理でした。来年のOM便りに寄稿していただくことにしました。常に、若い人達が集うHdBには、日本で、世界で活躍する人材を輩出していることを本当に嬉しく思っています。

HdBの活動とその存在を皆様に知って頂く目的で開催しているのが公開講演会です。本誌には第4回の講演記録が掲載されています。また本年**2024年6月29日（土）には**京大病院の南西角にある「**京都教育文化センター 103号室**」（京都市左京区聖護院川原町4-13）にて、第５回を開催します。多く皆さんに参加して欲しいと思っています。

年刊誌「YEAR BOOK」への賛助広告について

（公財）京都国際学生の家（別称 HdB、Haus der Begegnung：出会いの家）の年刊誌「YEAR BOOK」は、各国大使館領事館は勿論のこと、関係省庁にも配布し、世界の各地で活躍する卒寮生にも送付しています。発行部数は 900 部です。コロナ後様々な値段が高騰していますが、「YEAR BOOK」は絶やすことは出来ず、HdB の卒寮生や京都の会社等々に、協賛広告の掲載していただくという形でのご支援をお願いしています。

ＨｄＢの生活は、一生の宝物！！

当社は「魅せる防災」で社会課題に貢献！

ＫＢＳ京都ＴＶで放映されました

大型蓄電装置を開発中

災害復興支援や避難民キャンプ向け

従来の非常用電源盤（ソロモン、ミャンマー、中国）

アリス・チャン（香港）と業務提携

留学生が働きやすい職場環境（ﾐｬﾝﾏｰ、中国、ﾌﾞﾙｶﾞﾘｱ、ﾓｻﾞﾝﾋﾞｰｸ、ケニア、台湾、モンゴル、ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ他 10 ヶ国）

WAKO 和晃技研株式会社

代表取締役社長 **岩﨑 隆二**（京大機械工学科卒）　専務取締役 **岩﨑 マリ**（同志社大心理学科卒）

【本社】京都市南区西九条豊田町 26 【研究所】京大桂VP 【営業所】秋葉原、室蘭、香港

Year Book，Vol.48．2023
イヤーブック　第 48 号

編集者　内海博司　村田翼夫　平野克己　嘉田良平
山本慶一　笹山幸子　吉村一良　木葉丈司
前川佳世子　福田彩乃

発行日　2024 年 3 月 31 日

発行者　公益財団法人京都国際学生の家
Kyoto International Student House
（Haus der Begegnung, Kyoto）

〒606−8325　京都市左京区聖護院東町 10
10，Shogoin−higashimachi，Sakyo−ku，Kyoto−Shi，
Kyoto 606−8325，JAPAN　Tel：075−771−3648
e-mail: office@hdbkyoto.jp
home page: http:hdbkyoto.jp

印刷所　（株）北斗プリント社（075−791-6125）

本イヤーブックの印刷・製本の一部は、賛助広告掲載料でまかなった。

裏表紙のことば：
Pax in terra　地に平和を
Pax intrantibus, Salus exeuntibus　訪れるものに安らぎを　去り行く人に幸せを
*下文は、ドイツ　ローテンブルク市のシュピタール門に刻まれたラテン語

Kyoto International Student House
1965

http://hdbkyoto.jp/

Pax in terra

Pax intrantibus, Salus exeuntibus